新白山文学

別冊第五号

東洋大学文藝サークル“綴”
2015

あの空と水平線の魔法使い　草津出　1
永遠の夢　林羽夢　19
ステップはやめないで　八名井明　25
Ｊｅｗｅｌｓ　はるゆかり　31
ジュゼッペじいさんとマルコ少年の進化論　はるゆかり　35
さよならサンクチュアリ　八名井明　39
私の美、彼らの美　はるゆかり　45

あの空と水平線の魔法使い

草津出

こんなに澄んだ空を見るのは、いつ以来だろう。
雲一つない、現実から切り離されたんじゃないかと錯覚を受けるほど、青く澄み渡った空。自分がちっぽけな存在だということを実感させられるくらい、それは広く、深く続いている。
空は幼いころに眺めたそれとほとんど変わっていなかった。年の近い子と暗くなるまで遊び明かして、毎日が楽しくて、これから自分がどうなるのだろうなんてこれっぽっちも考えていなかった頃の、俺が俺になる前の空。空が変わらないだけなのか。あるいは俺が変わってしまっただけなのか。それはきっと、この空だけが知っている。
もうこの空を見ることはないと思っていたはずなのに。どうして俺は、またこの場所に立っているのだろう。
足元に視線を移す。足の先では、底が見えないくらい深い青を湛えて、水が揺らめいていた。このまま俺をすっぽりと覆ってしまいそうな深さだ。
俺は今、そんな海の上に立っている。
先を見渡しても、続いているのは濃い青ばかりで、向こうにぼんやりと影が見えるだけだ。まだ少し陸地は遠い。目的地まではもう少し時間がかかりそうだった。
久しぶりに訪れるあの島は、変わってしまっていないだろうか。変わってしまった俺を、受け入れてくれるのだろうか。
どこかで海鳥の声が聞こえてくる。俺はそれを背に受けながらゆっくりと歩みを進めていった。踏みしめるたびに、足元で波打つ水面が俺を中心に小さな波紋を伝えていく。まるで世界が俺を起点に動いているかのようだ。それは今にも世界に絡めとられそうになっている現実とはまるで逆で、少しばかり、滑稽だった。
海を歩くためにチカラを常に放出しているせいか、頬を一筋の汗が伝った。俺はそれを大げさなモーションで拭う。大分体力を消耗してしまっているらしい。身体にかかる重みは少しずつ、俺を蝕み続けている。今すぐにでも立ち止まってしまいたかった。けど、歩みを止めてしまえば、この苦しみから逃れることができるのだろうか。逃れた自分を、俺は肯定できるのだろうか。
掴みどころのない空虚な感覚が、俺を望郷へと駆り立てる。

何時間も歩き続けていると、まだ遠く先だと思っていた目的地も、いつの間にか雲の切れ間に濃い影を浮かび上がらせていた。
それは言いようのない懐かしさを内包していた。
俺はもしかしたらそれを求めていたのかもしれない。しかし或いはそれを二度と知りたくはなかった。
後悔の念が、更に俺の足を急がせていた。
自然と歩幅が大きくなる。

それにつれて、影は見慣れた輪郭を帯びてきていた。俺はあと少しだ、と自分の足に鞭を打ちながら、一歩一歩、着実に歩み続ける。
やがてその輪郭は、俺の網膜に明確なビジョンを結んでゆく。
――そしてそれは、俺の前に立ちはだかった。
俺はいつの間にか、目の前に映るいつか見た島の姿に、呆然と立ち尽くしていた。
戻ってきた……。
「……戻ってきたぞ……畜生ぉおおおおおおお！」
獣のように叫び声をあげていた。今まで感じたことのない衝動が、全身から溢れ出してゆくのが分かる。
急に脱力感を感じ、後ろに倒れこんだ。
海水のひんやりとした感触が背中に伝わる。まるで巨大な一枚鏡に背中を貼り付けたみたいだ。もしもそれがこの世の全てを写し出す鏡なのだとしたら、今の世界はどんな風に写っているのだろう。
どんな優しい世界が、写っているのだろう。
俺は世界に背を向けながら、ゆっくりと、その目を閉じた。

自分は何のために生まれて、何のために生きているのか。こんな境遇にいるせいか、そんなことをふと考えることが多くなった。
俺たちを捨てて消えた父親。そんな父を恨み続けながら野垂れ死んだ母親。両親の悲惨な結末を目にした幼い俺は、自分だけは決してこうなるまいと強く誓った。けれどその時、俺はまだ気づいていなかった。目の前には既に、両親と同じレールが敷かれてしまっているのだということに。
俺が支部長室に呼び出されたのは、一週間前のことだった。
木製の重厚な扉の前に立って、深く深呼吸をする。全身が小刻みに震えているのが自分でも分かった。この扉の前に立った時はいつもそうだった。身体の芯から湧き上がるような震えが駆け巡る。これは緊張ではなかった。無論、恐怖でもない。憎悪だ。堪え切れないほどの憎悪が、この扉一枚隔てた向こう側にいる男のことを想像しただけで溢れてくる。
俺は持ち上げた拳に力を入れながら、静かにノックをした。
「真壁和臣(まかべかずおみ)三等監察官です」
「入れ」
扉の奥から声が聞こえる。初めて耳にした者ならば物怖じしてしまうような重々しい低音が、鳩尾にのしかかる。
「失礼します」

俺はノブを回して、その室内に立ち入った。
部屋の奥には男が一人だけいた。四十前半といった感じの男だ。高級そうな一人掛けソファに深く腰を落とし、この部屋に入ってきた俺の姿を、ただ異物を見るような目で眺めている。今や俺と奴と間を埋めているのは、なめらかな光沢を放つ机だけだった。
俺はすぐにでも目を背けたい思いを抑えつつ、男に問いかけた。
「ご用件とは何でしょうか、野呂(のろ)長官」
そう、この男の名は野呂と言った。この名前は俺にとって、できれば二度と口にはしたくなかった名だ。
野呂は眉ひとつ動かさぬまま、まるで人の皮を被ったマシーンのような表情で口を開いた。
「貴様に、第十七区の管理を任せる」
「……は？」
俺はその時、自分が聞き間違いをしたのかと思った。
「いま、何と……？」
俄かには信じ難かった。俺の耳には確かに、十七区の管理を任せると、そう聞こえた。区画の担当が割り振られるのは、原則では一等官からと決まっている。それに満たない監察官が、それも俺のような下っ端が任される例など、一度だって聞いたことがなかった。
「二度は言わん」
「ですが」
「口答えは許さん」
野呂は戸惑う俺の言葉を淡々とした声で遮った。
「魔術者に人権などない。貴様はただ、命令に従えばいい」
俺には返せる言葉がなかった。これ以上逆らえばたとえ殺されたとしても文句は言えない。俺は喉から出かかった言葉を、飲み込むしかほかになかった。
野呂は確かに十七区と言った。しかし、野呂だって知らぬはずがないだろう。十七区は、監察局からそう呼称されているあの島は、俺の生まれ故郷なのだということくらい――。
野呂はどこからか茶封筒を取り出し、机に放り投げた。俺はその封筒を拾い上げる。
「これが今回の任務の詳細だ。そこに載っている者を、監察対象とする」
封筒の中には、顔写真の添付された二枚の資料が入っていた。一枚目の資料には、小野瀬薫(おのせかおる)、とある。見た目からして十七、八歳くらいの少女だ。
しかし俺には、その少女の顔に見覚えがなかった。十七区は人口が百人にも満たない小さな島だ。数年前までそこで生活していた俺にとって、知らない住民は一人もいないはずだった。だがこの少女の顔は、自分の記憶の中をいくら漁ったところで出てこない。
「『変わり種』だ」
野呂は俺の疑問を見透かすようにそう言った。俺はそれで、この写真の少女のすべてを察する。
「……厄介事は押し付けようってハラですか」
「黙れ。貴様はただ忠実に任務を遂行すればいいのだ」
もう一度写真の少女に目を戻した。学校の制服――恐らく島に来る前に通っていた学校の制服だろう――に身を包んだ彼女は照れくさそうにぎこちない笑みを浮かべている。きっと写真の中の彼女は、まだ自分の身に降りかかる運命を知らないのだろう。現実を知った彼女は、今、一体どんな表情を浮かべているのだろうか。
「だが、『変わり種』の件はついでだ」
「ついで？」
俺の問いかけに、けれども野呂は答えようとはしなかった。伝えられるのは、必要最低限の情報だけ。それが俺のような者たちに対するいつもの扱いだ。
「一週間後だ。それまでに準備をしておけ」
野呂はそれだけを言うとすぐに視線を外し、懐から出した煙草に火を点け始めた。まるで、もう俺のことが見えていないかのようだった。
俺は野呂の前で形だけの敬礼をして、その場から立ち去る。
この時の俺は、忌々しい奴のもとから一刻も早く遠ざかりたい、そんな思いで一杯だった。握っていた封筒は怒りに震えた手で、もう既にクシャクシャになっていた。
俺が資料の二枚目の人物が誰なのかを知るのは、もう少し先のことだ。

――おーい！
遠くで声が聞こえる。懐かしい声だ。
「おーいったらおーい！」
それは俺が島にいたころ、毎日のように耳にしていた声だった。本当にここに帰ってきたのだと、否が応でも実感させられる。できればこのまま、こうやって海の上に寝転びながら、この懐かしい声をずっと聞いていたかった。
「聞えてないのかな？」
「……聞こえてるよ」
声のする方を、見ないまま俺は答えた。彼女は今どんな顔をしているのか、俺はどんな今顔をすればいいのか、分からなかったから。
「そんなところでゆらゆら揺れて、なにしてるの？」

しかし彼女はそんなことちっとも気に留めていないような口調でそう言った。
「さあな」
俺はゆらゆら揺れながら答えた。
「でもなんだかちょっと、楽しそうだね」
「……ま、お前がそう思うなら、そうなんだろ」
細波が砂を巻き込みながら、浜に打ち寄せているのが聞こえる。
俺は彼女に目を合わせずに、姿だけを横目で盗み見るように眺めた。流石に何年も経っているせいか、そこにいる人物は俺の記憶の中のそれとは幾分かズレを生じさせていた。身体の外周を結ぶ女性らしい曲線は、俺を少しばかり困惑させる。けれど彼女の表情に張り付いたいたずらな笑みは昔見た少女そのままで、俺はそれに安堵を覚えた。
彼女は寄せて返す波の動きをしきりに気にしながら、できるだけ俺のほうに近寄ろうとしている。
「そんなに気になるなら、こっちに来たらどうだ？」
「できたら苦労しないってばー」
彼女は抗議するように言った。
「いつまでも海の上で浮かんでないでさ、早くこっちに上がってきなよ」
「俺は海の上が好きなんだ」
俺は言った。
俺は臆病者なのかもしれなかった。すぐそこに島はあるのに、今さら怖気付いて上陸できないでいる。俺はもうあの島の住人ではないことくらい、分かっているはずなのに。頭の中では分かっていても、どこかで俺はかつての情景に土足で乗り上げることに、躊躇いを感じている。
故郷は、俺の思っていた以上に遠いものだった。空だけは、あの時と同じ色で俺たちを包んでいるというのに。
「よおし」
浜の方から間抜けな声がした。ごそごそと、衣擦れの音が聞こえてくる。
「おい、何してる？」
だけど答えはない。
「おい！」
俺は咄嗟に体を持ち上げた。見ると少女は、履いていた靴を砂浜の上に綺麗に並べ、両足の裾を捲っている。
「何のつもりだ？」
少女はそれに答える代わりに、足を海水の中に突っ込んだ。そして波に逆らいながら、海の中を進み出す。
「おい、止まれ」
制止を促すも、彼女の動きは一向に止まることがない。脚が海水を蹴り上げて、水飛沫を飛ばす。それは照りつける太陽に当てられて、どこか眩しく見えた。
「止まれって」
彼女の身体は既に腰近くまで浸かってしまっていた。ズボンの布は海水を吸って重く沈み込んでいる。せっかく捲り上げたのに、これではもう意味がない。それでも彼女は、俺のほうに近づき続けていた。一体何がそこまで彼女を駆り立てているのだ。
「来るな！」
俺は叫んでいた。あの子に今触ってしまったら、戻れないはずの昔に閉じ込められてしまいそうな、そんな気がした。
それなのに少女は歩みを止めようとはしなかった。海をかき分ける音はもう、そこまで迫ってきている。
どうしてだ。どうしてこの少女は、こんなに真っ直ぐ向かってこられるんだ。拒まれてもなお、一度も躊躇することなく。
――そして気づいた時、彼女の手のひらは、俺の頬に触れていた。
「やっと掴まえた」
今が夏だといっても、海水は身も凍るほど冷たい。そんな海の中を進んできたせいか、少女の手はひんやりとしていた。彼女の手の中から、そして俺の服からも海水が滴り落ちてゆく。せっかく魔法で身体を覆っていたのに、彼女の起こした波のせいでびしょ濡れだった。
俺は少女の顔を見た。
彼女は泣きそうな顔をしていた。
「どうしてお前は……」
「だって目合わせてくれないなんて、淋しいから」
少女はそう言った。
――俺は何のためにこの島を出たのだったろう。父親の後を追うためか？　過去を忘れるためか？　違う。それはこの島で産まれたことを後悔しないためだ。なのにどうして、今の俺は。
「ゴメンな」
同じ空を共有していることだけが、せめてもの救いだった。
「……うん」
俺は少女の手を取って、海上へと引き上げる。震える手から彼女の温もりが伝わってくる。しかし俺はもう躊躇わなかった。
少女を海の上に立たせた。さすがの俺でも二人分の浮力をコントロールするのは少々骨が折れるが、直ぐ陸に上がれば問題ないはずだ。

「海の上に立つのって、こんな感覚なんだね」
「さっさと岸に上がるぞ」
俺は少女の手を引きながら歩き出した。
もう二度とこの島に来ることなんてないと思っていた。そんな俺がもう一度ここに足を踏み入れるなんて、どんな神様の悪戯だろう。でも再びこの場所に訪れることには、きっと意味がある。
少女は、かつて見た笑みと同じ表情を重ねながら俺に笑いかけた。
「おかえり、和くん」
「ただいま、七海(ななみ)」
俺は歩いてゆく。この不条理な世界を終わらせるために。この空のように、何処までも同じ世界が続いていけるように。
水平線の彼方にとろけてゆくように、俺はあの、碌でもない世界を見送った。

島から見る風景は、俺がここから去ったあの日と、さほど変わってはいなかった。それはこの島が、本土の流行なんて届かないくらい辺境の地だからなのかもしれない。だけど多分それだけではないはずだ。この島にあるもの全てが、きっとこの頬を撫でる穏やかな風も、ここに留まることを強いられている。
「ねえ」
すぐ横で歩いていた七海が口を開いた。
「なんだ」
碌に舗装されていない海岸沿いの道を二人で歩く。成長したといっても七海はやはり俺よりも一回りも二回りも小柄で、歩幅も小さい。だから少しでも油断しようものならすぐに距離が離れてしまいそうになる。俺はできるだけ七海に歩幅を合わせて隣を歩いた。だってもしかすると、七海と同じ道を歩く機会なんて、もう二度とやってこないかもしれないのだから。
「どうして、和くんはこの島に戻ってきたの？」
「さあな」
七海の問いに、俺は答えなかった。七海が知っても仕方のないことだったからだ。知ったところで何かが変わるわけじゃない。だったら、知らないでいたほうがずっとマシなはずだ。
七海は俺の反応が気に入らなかったらしく、顔をしかめた。だけどすぐに勝ち誇った表情にかえて俺の顔を覗き込む。
「だったら当ててあげようか」
「どうぞ」

「この前ね、学校に新しい子が一人転入して来たんだ。小野瀬薫って子なんだけどね」
小野瀬薫と言えば、俺の今回の監察対象になっている少女だ。そういえばあの子って、七海と同い年だったっけ。と、前に見た資料を頭に描きながら思う。
「ズバリ、薫ちゃんの監察をしに来たんでしょ！」
「半分正解、かな」
「じゃあもう半分は？」
「教えねーよ」
俺は頬を目一杯膨らませている七海を見ていないふりをしながら、歩き続ける。
「ところでさ」
「なに？」
「七海は今日、なんであそこに居たんだ？」
聞くと、七海はたった今思い出したように呟いた。
「あ……学校に行く途中だった」
「学校？」
今は夏休みだから、行く必要はないはずなのだが。
すると七海は少し照れくさそうに言った。
「えーっと、実は補習に引っかかっちゃいまして」
「ばーか」
「バカじゃないもん！　たまたまだよ、たまたま！　たまたま鉛筆転がして答えた問題が全部外れたから」
それを世間一般的にバカと言うんじゃねえか。
七海は学校のある方向にくるりと身体の向きを変えた。
「じゃあ七海は学校に行くけど、和くんはどうするの？」
「俺は……」
そうだ、俺には目的がある。七海と一緒にいたらついつい忘れてしまいそうになってしまうが、俺がこの地に戻って来たのは別に帰省のためじゃない。
「俺は小野瀬薫って子に会ってくるよ」
「やっぱり監察局のお仕事？」
「ああ」
「……そっか」
七海の顔は、心なしか曇ったように見えた。いや、気のせいかもしれない。けど、たとえそれが気のせいだったとしても、俺がこの立場にいる限り俺と七海の間には少なからず壁がある。どんなに昔のように振る舞まおうが、そこには以前とは決定的な差が横たわっている。
「それじゃ七海、行くね」

七海がぱたぱたと駆けていく。そして俺から少し離れたところで、翻って小さく手を振った。
「またね」
さよなら、と言おうとしないのは、七海の俺に対するちっぽけな抗いなのかもしれない。
俺もさよならの代わりに、踵を返して歩き出した。

小野瀬薫、か。
そういやあの子って、今はどこに住んでいるのだったろう。渡された資料に載っていたような気もするが、よく覚えていない。七海にでも聞いておけば良かったのだが、もう別れてしまったのでそれもできない。
「まあいいか」
どうせこの小さな島の中だ。適当に歩いていれば、そのうち見つかるだろう。
俺は当時の記憶を頼りに、島の中を歩いた。
しばらく歩いていると、見覚えのある建物が見えた。入り口に掛けられた看板には竹中商店と書かれている。海風に当てられてひどくくたびれているところまで、昔とそっくりだった。そういえば、昔はここのオジちゃんによく世話になっていたっけ。
俺は懐かしさを感じて何となく、店の前に立つ。そして門を叩こうとして、やめた。
きっと俺が顔を出しても、オジちゃんが困るだけだ。俺はもう、ここの住民じゃない。監察局の人間なのだから。
振り返って、来た道を引き返した。
分かってはいたけど、
「やりずれぇなぁ……」
この島の人間にとって、監察局の人間は邪魔者でしかない。そんなこと分かっていたし、割り切っていたつもりでもいたけど、やっぱり居心地の悪さだけは拭えない。
俺は逃げ出したい気分になって、天を仰いだ。
俺にはやらなくちゃいけないことがある。そしてそのために自分で自分の道を選んできたつもりだ。だけど、本当にこの選択が正しかったのか、時々、分からなくなる。
本当に住民の恨みを買ってまで、監察官になる必要があったのだろうか。
セミの鳴き声も、島を包む夏の暑さも、すべてが俺に敵意を向けているような、そんな気さえする。
だけど俺は立ち止まっているわけにはいかない。この糞ったれな世界に唾を吐きかけるまでは、死ぬわけにはいかないんだ。
俺は前を向いた。前を向くことで、そのしみったれた感情を払拭できるような、そんな気がして。

「あら、もしかして和臣ちゃん？」
その時だった。不意に後ろから声を掛けられたのは。
振り向くと、そこには三十代くらいの女性が立っていた。
「ほら、やっぱり和臣ちゃんじゃない」
俺はこの人を知っていた。でもその姿は、俺がこの島を出た時最後に見た姿と、何ひとつ変わっていなかった。
彼女は七海の母親とは思えないほど、七海を女手一つで育ててきたとは思えないほど昔の姿そのままだった。俺はその、衰えを感じさせない若々しいその人に少しだけ面食らいながら、言葉を紡いだ。
「久しぶり、真澄(ますみ)さん」
俺の声に微笑んだ真澄さんは、幼い日に見た彼女の姿と重なった気がして、何だか痛かった。
「今日から新しい監察官が赴任するって聞いてたけど、和臣ちゃんだったんだ？」
「ああ、うん」
「そっかそっか」
感慨深げに頷く。
「七海にはもう会った？」
「ついさっき会った。補習だからって学校行ったけど」
聞くと真澄さんは大仰に溜息を吐いた。
「ったく、あの子は……」
七海の自由奔放さには、真澄さんも手を焼いているらしかった。
真澄さんは大きく伸びをしてから、下ろしたその腕である方向を指した。
「立ち話もなんだからさ、ウチに来なよ」
だけどその提案に、俺はすぐ首を振ることはできなかった。
「いいのかよ？」
「なーに遠慮してんのよ」
だって、俺といたら。
「監察官といるとこ見られでもしたら」
真澄さんに迷惑が掛かってしまうかもしれない。
「気にしないわよ、そんなこと」
だけど真澄さんはそんなことどうでもいいというふうに嘯いた。
「だってウチら親子は島で、もうとっくに」
そして海岸の向こう、海の先に視線を送る。
「孤立してんだしさ」
空はこの世のすべてを見渡せるくらいに澄んでいて、水平線以外何も存在していな

い海だけが、残酷に水を湛えていた。

「さあ、上がって上がって」

真澄さんに促されて、家に上がった。

母と娘の二人暮らしを続けているせいか、家に男性の影はなかった。記憶の中のこの家よりも、生活感が足りない。よく言えばすっきりしているとも言えるけど、何だかもの寂しかった。

「あー、疲れた疲れた」

真澄さんは真っ先にキッチンに向かって、冷蔵庫の中をごそごそ探りはじめた。

「昼間っから酒かよ」

「和臣ちゃんはビールいる？」

「いらねっつーの」

俺は今の中央に置かれた丸テーブルの前に座って胡坐をかいた。真澄さんがキッチンから戻ってきて、缶ビール片手に俺の向かい側に座る。

「和臣ちゃんってたしかもう二十歳でしょ？」

「ああ」

「だったら遠慮しないで飲めばいいじゃない」

「酒嫌いなんだよ、俺」

「お酒に弱いの、父親譲りね」

父親、その言葉に俺の心はざわついた。

「……あの男の話はやめろよ」

「あら、もう踏ん切りがついたのかと思ったのに」

「俺の父親は、もう死んだんだ」

言葉は俺の中に、僅かなしこりを残していく。真澄さんは俺を見ながら神妙な顔で溜息を吐いた。

「明穂(あきほ)は何をしたかったのかしらね。こんなふうに、自分の子供に罪を背負わせてさ」

「母さんは関係ない」

「そう？」

含みのある口調で言う。

「ま、いいけどね」

そう言ってビールの蓋を開ける。空気の抜ける小気味良い音がして、それから真澄さんの喉が鳴った。

「ところで和臣ちゃんって、どうしてこの島に戻ってきたわけ？」

「さあな」

すると真澄さんは、缶を傾けながら、わずかに口の端を上げた。

「だったら当ててあげようか？」

「……」

「この島での任務に乗じて、監察局に反旗を翻そうとしている。違う？」

「正解だって、言って欲しいのか？」

「いや？　そうだったらちょっと面白いかなーって」

「……七海の自分勝手な性格は、母親譲りなんだな」

「美人なのもね」

真澄さんの唇がニヒルに笑った。

「よく言う」

俺はその飄々とした態度に少し腹が立って、思わず吐き捨てる。

「そもそもあんただって、他人のこと言えんのかよ」

そして気付いた時にはもう、自分では留めようがなくなっていた。

「あんたらが余計なことをしなけりゃ、七海はもっと幸せに生活ができたはずだろ」

真澄さんは黙って俺の声を聞いていた。俺は卑怯だった。真澄さんが口を挟もうとしないのを良いことに、自分の怒りを理不尽にぶつけようとしている。

「あんたの旦那がクーデターなんか起こさなけりゃ！」

だけど、俺はもう、この怒りの捌け口を他に知らなかった。

「七海が今、どういう状況か分かってんのかよ」

だって、俺たちに平気で咎を押し付けようとするあいつらのことが気に食わなかったから。そのせいで。

「あんたらのせいで七海は今、監察局に目を付けられてんだよ！」

そのせいで俺たちは、今も苦しみを背負い続けているのだから。

「あんたらのせいで……！」

だけど、俺が吐き捨てるようにその無責任な糾弾を終えたとき、俺の中の怒りは急速に熱を失って。後に残ったのは、痛々しく佇む真澄さんの姿だけだった。

「……ごめん」

俺は謝罪を口にした。

謝罪の言葉を述べるなんていう最低の行為をしている自分が、どうしようもなく情けなかった。

「ううん、ウチらに責任があるのは確かだしさ」

真澄さんは気にしていないとでも言いたげにビールを呷った。俺は居た堪れなくなって立ち上がる。

「あのさ、俺帰るよ。仕事中だしさ」

「仕事？」

「ああ。小野瀬薫って子の監察も任されてるんだ」
「小野瀬？　ああ、最近こっちに来た子のことね。明穂と同じ『一世代目』の」
真澄さんの呟きで、母さんもあの子と同じ境遇だったことを思い出す。
「……自分が魔法使いだって知ってしまったあの子は、果たして幸せなのかしらね」
そんなの。
「不幸に決まってる」
だけど真澄さんは俺の言葉を否定するようにそれを重ねる。
「それは和臣ちゃんが決めることじゃないよ」
真澄さんのそれは、過去を反芻しているようだった。真澄さんはきっと、母さんのことを考えているのだと思う。だけど俺の記憶の中の母さんは、不幸な姿そのものでしかなくて。もしも母さんの不幸が、なるべくしてなったものではないのだとしたら、一体どこでそれは分岐してしまったのだろう。
「その子は今、どこに住んでるか知ってるか？」
「たしか、島の南のほうにある空家を仮住まいにしてるって聞いたけど」
それだけを聞いた俺は、真澄さんに背中を向けた。
「待って、最後に一つだけいい？」
けど、真澄さんはその背中を呼び止める。
「なんだよ」
「誰かが幸福であるかなんて他人が決めることじゃない。けど、誰かの幸福の手助けくらいは、きっとできるんじゃないかしら」
過去はいくら喚いたって変えることはできない。母さんを救うにはどうすれば良かったのかなんてことをいくら考えたって、それは不毛なだけだ。だけど今生きている人間の未来を変えることはできる。
小野瀬薫が母さんと境遇が似ているのだとしても、今からならいくらだって修正することができるはずだ。
だけど、たとえ小野瀬薫の未来が上手くいっても、それは母さんの過去には結びつかない。
母さんへの償いとして彼女を救おうとしても、それはただの自己満足でしかないんだ。
なのに、なんであんたは俺にそれをけしかける？
真澄さん、それがあんたの贖罪なのか？
真澄さんに聞いた情報を頼りに島を南に進むと、一際ボロい家が見えてきた。
というかボロいというより、ほとんど廃屋に近い。壁板はが海から運ばれた潮風にやられて、ところどころ痛んでしまっている。屋根も廃材寸前で、窓ガラスはひび割れていても碌に取り替えられちゃいない。
まったく家と呼んでいいのかすら怪しい代物だが、実は俺はこの家を以前から知っていた。
ここには昔、子供好きの婆さんが住んでいた。遊びに来た子供たちをまるで自分の孫のように可愛がってくれて。俺もよく七海を引き連れて遊びに行っていた。
だけど今、目の前にあるそれは、記憶に残っている光景とはだいぶ違っていた。たぶん使わなくなってから何年か放置されていたのだろう。そして、たぶんここに住んでいた住民はもう二度と戻って来ないのだろう。つまりそういうことだ。
俺は伸びきった草むらをかき分けながら進んでいった。
それにしても、よくもまあこんなところに住めるもんだ。仮にも年頃の女の子のはずだろう。よっぽど肝が太いのか、それか自分の置かれた状況をまだ飲み込めていないのか、どちらかだ。
ここにいる少女は、どんな子なのだろう。
――いわゆる『一世代目』。
監察局の奴らは『変わり種』とも呼んでいるそれは、簡単に言えば、『普通』の人間から生まれた『魔法使い』のことだ。自分たちのことを『普通』と呼んでいること自体、奴らのエゴ以外の何物でもないが、とにかく、両親が魔法使いでなくてもごく稀に魔法を使える者が生まれることがあるのだ。
だが魔法使いだと判明した人間の末路は悲惨だ。魔法使いだということが判り次第、この島をはじめとした『魔術者隔離区域』に放り込まれ、自由を奪われる。物心付いたころからこの島で暮らしている俺たちと比べたら、そんな彼らの喪失感は、きっと計り知れない。
ここにいる少女もまた、そんな『一世代目』の魔法使いだ。彼女は自分が魔法使いと知ったとき、何を思ったのだろう。抗うことのできない自分の運命を恨んだろうか。そんな彼女に、俺は一体何ができる？
「ま、そんなの職務には含まれていないけどな」
自虐的に呟いた。だけどそれは誰の耳に届くこともなく霧散する。
判明したのが十七歳になってからだというのだから、おそらくそこまで魔力の適正は高くないのだろう。でもそれは、監察官を除いて魔法使いしかいないこの島に馴染むのが容易でないということでもある。
先程の真澄さんとの話を思い出す。突然周囲から切り離されて、こんな土地に放り込まれたことを不幸じゃないと言うのなら、それはただの欺瞞だ。
俺は立てつけの悪い扉を軽くノックしてから、何も断りを入れずにそれを引いた。
カギはかかっていなかった。中は、外観とは違って片付いていて、でも長年放置されていたためかまだ埃っぽさは抜けきっていなかった。靴を雑に脱いで上がり込み、

板張りの廊下を抜けて居間へと進む。
　居間の中は、驚くほど生活感がなかった。部屋の端に段ボール箱がいくつも積み上げられているだけで、他には何もない。たぶんその段ボールもほとんどが、運ばれてから一度も開けられていないのだろう。
　そしてその真ん中で少女が一人、膝を抱えて座っていた。
俺の気配に気づいたのだろう、少女は僅かに顔を上げる。俺は彼女の動きを待っていた。やがて彼女の瞳は俺を捉える。
「あなたは……」
「監察局だ。聞いたことくらいあるだろ？」
　少女は答える代りに目を伏せた。
「今までもさんざん聞かされてきたかもしれないけど、キミはこれからこの島で暮らしていくことになる」
　塞ぎ込む少女の前で、俺は無慈悲にも現実を突きつけていた。まだここに連れてこられてから間もなくて、混乱しているかもしれないのに。けどこの子だって分かっているはずだ。もう元の生活には戻れないということくらいは。
「キミがこの島に慣れるまでは、俺の監督下で生活してもらう」
　俺の言葉に、少女が一層深く沈み込んだのが分かった。見ていて痛々しい。
その苦しそうな彼女の横顔に一瞬だけ、母さんが重なって見えた。くそ、真澄さんとあんな話をしたせいで。
でも俺はこの少女を、苦しめるために来たわけじゃない。
「……とまあ、前置きはこれくらいにして」
　少女の隣に並ぶように腰かけた。床板は夏の僅かな冷気を吸って、どこかひんやりと心地良い。
　少女は俺の行動に少し戸惑っているようだった。俺はそれに優しく声をかける。
「どうせこっちの世界に来ちまったんだ。折角だから楽しもうぜ、魔法使いとしての生活をさ」
　この子が今の状況をどう思っているのかは知らない。けど少なくとも、前を向いた方がこれからを悲観し続けていくよりはよっぽどマシなはずで。
「――俺もさ、魔法使いなんだ」
　だから、俺は彼女に告白した。彼女の張りつめた糸を、少しでもいいから解きほぐしたかった。
「え……？」
少女は驚きながら顔を上げた。けど当たり前だ。普通は、魔法使いは監察官になれないのだから。
「魔法使いなのに、監察局に所属してるなんてバカみたいだろ？　自分も魔法使いなのに、魔法使いを虐げる手伝いをしてるなんて、とんだピエロだ」
　俺は自嘲しながら呟いた。俺の立場は、それだけでこの島の住民を傷付けている。それなのに七海や真澄さんは、俺に対して昔と同じように接しようとする。もっと冷たく接してくれた方が割り切れるかもしれないのに。
いや、それだけじゃない。この島に変わらずそよぐ風は、心地良すぎて今の俺には痛いんだ。もう俺には素直に全身でその風を感じることができない。これが、俺がこの島から離れた代償なのだ。
「けど、だからこそ、キミみたいな子の気持ちも分からなくはないんだ。俺も、この島と外の世界の両方を見てきたから」
　もしも彼女が、この島と外の世界との軋轢に苦しんでいるのなら、俺が力になれるのかもしれないと思った。
「何か困ったことがあったら、いつでも言ってくれ。そのときは、できる限り助けになるから」
　これがこの少女を救うための答えになっているなんて己惚れた考えを持つ気にはならない。けど彼女の苦悩のほんの一部でもすくい取れるのなら、悪くない。
「あのっ――」
　少女がおもむろに口を開いた。でも俺はその言葉をさえぎる。
「和臣」
「え？」
「真壁和臣だから、俺の名前」
「……真壁さん」
「悪いけど、下の名前で呼んでくれないか？　苗字でよばれると背中がムズ痒くなるからさ」
「……和臣……さん」
「ああ」
　まだ『さん』付けだけど仕方ないか。他の監察官みたいな、住民を恐怖で屈服させるなんて真似をしなくて済むなら、それで良い。
「私の名前は――」
「薫、だろ？」
　薫は俺を上目で見てから、静かにこくんと頷いた。そしてわずかに震えた唇で俺に問う。
「和臣さんは――なんで、監察官になったんですか？」
　その答えは、俺の中でずっと前から一つしかなかった。
「海を見せるためだ」
「海……？」

「いつも俺の後ろに引っ付いて半ベソかいてたやつに、いつか世界中の海を見せてやりたいんだ」
そこまで言って、立ち上がって埃を払った。
「さて、薫とのお目合わせも済んだことだし、今日はここで退散しようかな」
まだ赴任して一日目だから、焦ることはない。時間はたっぷりあるのだ。それになんとなくだけど、薫はこれからきっといい方向に向かっていくような、そんな気がした。
「和臣さん」
薫が俺を呼び止める。
「ん、なに？」
そして不安げに言った。
「私、これからどうやって生きていけばいいんでしょうか」
いくら魔法使いになったといったって、薫はつい最近まで普通の人間として生活してきたんだ。これからの自分が不安になるのも仕方がない。
「俺が魔法の使い方を教えてやるよ」
だから俺は、そう提案していた。
「魔法が使えるようになったほうが、この島にも馴染みやすくなるだろうからさ」
そう言って部屋を見渡す。
何もないと思っていたが、部屋の隅に写真立てが一つだけ飾ってあるのが見えた。その写真の中には、三人が写っている。真ん中がたぶん幼い頃の薫。そしてその両脇に、優しそうに笑う男女の姿。
俺はこの笑顔が卑怯だと思った。
笑いかければ、それだけで子供に無条件に安堵感を与える。なのにその後、平気で子供を裏切ろうとする。
かつての俺の両親と同じ笑み。
俺はこの無責任な笑顔が嫌いだった。
「だから、もう過去なんて捨てちまえよ」
思わず口走っていた。
「自分を厄介払いした連中のことなんて、忘れちまえよ」
意図せず語気が強くなっていく。
でも、薫にとってもそのほうが良いはずなのだ。
魔法使いは他に生きる人間にとって忌み嫌われた存在だ。薫の両親が、彼女が魔法使いであることを知ったとき、一体どんな反応をした？　きっとそれは、恐ろしいものを見るような目だったはずで。
「たしかに、そうなのかもしれません」
薫は静かに、頷いていた。
「私のこと、厄介者だって、思っていたのかもしれません」
「だったら」
「でも」
薫の顔が上がった。その顔はどこか強い意志に満ちていて、俺は言葉を飲み込んだ。
薫はどうして、そこまで自分を邪険に扱った奴らを庇おうとするのだろう。
「ごめんなさい。やっぱり私は、想い出を捨てることはできないです」
薫は過去がこぼれ落ちていかないように、必死にそれを抱きしめているように見えた。

昔を思い出していた。
俺がまだガキで、親なんてものがいつまでも無条件に存在していると思っていた、そんな頃の話だ。
その頃俺の親父は、よく七海の父親と密会していた。その時どんな内容を話していたのかは分からない。子供の聞くことじゃないからと、いつも締め出されていたからだ。けど幼い俺にも、監察局の動きをしきりに気にしている、それだけはなんとなく分かった。でも俺は、それ以上深く考えを巡らせることはなかった。だって俺は満足していたから。父親がいて母親がいて自分がいる。たったそれだけの幸せに。
それからしばらくしてのことだ。親父たちがクーデターを起こしたのは。
「――おーい！」
向こうで誰かの声がして、俺は現実に引き戻される。
「おーいったらおーい！」
しつこく響いてくるその声に、俺は仕方なく起き上がった。
「なんだ七海、しつけーぞ」
「海好きだよねー、和くんってー」
七海は海上の俺に対して、力一杯に声を張る。
「なら七海も来ればいいじゃねーかー、こっちによー」
俺もそれに負けじと応戦する。
「だーかーらー、海を歩くなんてそんな器用な真似できるの、和くんだけなんだってばー」
七海は清々しいくらいの仏頂面で俺を迎えた。
「……ったく」
仕方なくその場から立ち上がる。海水が俺の動きを吸い取るように円形に広がっていく。その広がりが消えてしまわないうちに、俺は七海に向かって歩き出した。

七海の元に辿り着くのに、そう時間はかからなかった。七海は俺が来るまでずっと海の端で背伸びをしていた。
その姿が俺には何だか可笑しくて。俺は七海の額を軽く小突いた。
「そんなんじゃ、いつまで経ったって海は歩けねーよ」
「むうぅ」
「今日は学校に行かないのか？」
「今日は休みだもん」
「あっそ」
海岸を抜けて、歩き続ける。七海は俺の背後に張り付くように付いてきていた。砂浜に残る二人分の足跡は、波に飲まれて次第に消えてゆく。
「和くんはどこ行くの？」
「薫のとこ」
「会えたんだ、昨日」
「まあな」
そこから俺と七海のあいだに妙な沈黙が降りる。たぶん互いにもどかしさを感じていた。数年ぶりに再会できて話したいことがたくさんあるはずなのに、うまく言葉に乗せることができないもどかしさを。
その沈黙を打開したくて、俺は口を開く。
「昨日、薫に魔法を教える約束をしたんだ」
「え？　和くんが？」
「そうだ、文句あるか」
すると七海は突然声を荒らげた。
「ずるい！」
そして、俺の頬を無理くり横に引っ張る。
「いてっ！　あにすんだよ！」
「七海にも教えなさい！」
「ああ？」
教えるって、
「魔法をか？」
「もちろん」
七海はさも当然だというように、無い胸を張った。
「でもお前、魔法使えるじゃねーかよ」
「そうだけど、そうじゃなくって、もっと使えるようになりたいの」
そしてずい、と顔を寄せる。
「和くんみたいに海の上を歩けるようになって、魔法少女マジカル七海ちゃん！　みたいなことやりたいの！」
「えぇ……」
俺って七海の目にはそういうふうに映ってたのか？　ていうか、
「自分で恥ずかしいんならやんなよ……」
七海は耳まで真っ赤にしていた。
「……うるさいうるさいっ！　とにかく、七海に魔法を教えなさい！」
これ以上騒がれたらこっちも堪ったもんじゃない。
「わあったよ……」
ついに俺は観念した。
「よろしい」
満足気に頷いた七海は、やっと俺の頬を解放する。畜生、加減せずに引っ張りやがって。おかげでまだ七海の手の温もりが残っている。
「まったく、さっさと教えるって言っちゃえばいいのにさ……ん？」
「なんだよ」
「和くん、なんだか赤くなってるね」
「それはお前が引っ張ったからだろ」
「いやそうじゃなくて、おでこ」
七海の指が額に伸びてくる。触れられるのと同時に、僅かに痛みが走った。
「ちょっと腫れてるみたいだけど、どうしたの？」
自分でも触れてみる。たしかに少し腫れてたんこぶのようになっていた。
俺は七海が来る前に起こったことを思い出す。まだ十歳くらいの子供と目が合って。
そして、
「ガキに石投げられたんだよ、さっき」
「あー、もしかしてカスガちゃんのこと？」
「カスガ？」
その名前には心当たりがあった。
「あいつ、霞(かす)雅(が)だったのか？」
霞雅は、記憶では、俺よりもかなり歳の離れていた子の名前だ。
もうあんなに成長していたのか。俺がこの島を出たときは、まだちんちくりんだったというのに。
「んーと、前の監察官にもいろいろ噛みついてたから、たぶんね」
七海は少し煮え切らない表情で言った。それでなんとなく察しが付く。霞雅は俺が来る前にも、いろいろと問題を起こしてきたのだろう。おそらく子供じゃなかったら、即収容所行きになりかねないようなことも。
「あのね」

気付くと七海が真剣な面持ちで俺を見つめていた。
「お願いだから霞雅ちゃんのやったこと、和くんは怒らないであげて」
俺はその七海らしくない眼差しに、黙って頷くしかなかった。
「ありがと」
七海は俺の返事に笑顔で応えると、俺から離れてパタパタと駆けだした。それを見失わないように追いかける。
怒らないであげて、か。
さきほど霞雅に会ったとき投げかけられた言葉が、どこからか蘇ってくる。
『裏切り者』
恨まれて当然だ。
だって霞雅の両親は、監察局の奴らに処刑されたのだから。

手のひらにチカラを送り込むと、ビー玉が重力に逆らうように浮かび上がる。隣にいた薫は、その様子に驚きの眼差しを送っていた。
「魔法を使ってモノを浮かせること、これは基本中の基本だ。当然だけど重いものであればあるほど、動かすのにはチカラがいる」
このビー玉はここに来る途中、七海に店で調達させた。持ち上げるモノは、本当は何でもいいのだが、球体のほうがチカラを均等に行き渡らせ易いので練習には都合が良い。
今度は力を抜くと、ビー玉は途端に支えを失って手の中に落ちた。それをそのまま薫に渡す。
「今度は薫の番だ」
「えと、どうしたら」
「手を広げて、真ん中にビー玉を置いて。そして真ん中に神経を集中させるんだ」
俺の指示に従って、薫はビー玉を手のひらに置き、そしてそれを注視する。けれどもビー玉は一向に、宙に浮こうとはしない。
まあ初めはこんなもんか。最初から上手くいくなんて俺も思っちゃいない。
薫の額には汗が浮かんでいた。たしかに少し蒸し暑い。大気を操って薫のほうに風を送り込んでやる。風が薫の前髪を撫でた。
「上手くいかなくても諦めるな。もっと一点に集中して」
俺のアドバイスに呼応して、視線に力がこもる。
「ねー、私にも何か教えてよー」
七海が背後から顔をのぞかせて、茶々を入れてきていた。
「お前はあっちで逆立ちでもしてろ」
「和くんの、けち！」

俺は七海を無視して薫の練習を再開しようとする。
「けーち！　けーち！」
……しようとするのだが、七海が後ろでけちけちコールを連呼していた。おかげで激しく気が散る。
「うるせえな、薫が集中できねえじゃねーか」
「私は、大丈夫、ですから」
そうは言うものの、薫も明らかに集中力が乱れて腕がプルプル震えている。
「教えてくれたら何も言わないのに」
七海がふてくされ気味に言う。
「教えてくれって、具体的に何をだよ」
すると七海は、待ってましたと言わんばかりに声を張り上げた。
「そりゃもちろん、海の歩き方！」
七海の答えに、俺は溜息を吐いた。
「お前にゃ無理だ」
「そんなのやってみなきゃ分かんないじゃんか！」
「……じゃあこうしよう」
地面に置いてあった袋から、余っていたビー玉を五つ取り出す。そしてそれを七海の前に突き出した。
「このビー玉を五センチ間隔で、縦に一直線で浮かせてみろ。そしたら考えてやる」
「ええー、そんなの無理に決まって――」
七海が弱音を吐くのと同時に、俺は手に力を込める。すると五つのビー玉は手の上でまっすぐ一直線に並んだ。
「どうだ？　これが出来ないんなら諦めろ」
「むううう」
むすっとしかめっ面を作った七海は、やがて眉間に皺を寄せたまま叫んだ。
「これくらい七海にだってできるし！」
そして俺の手から強引にビー玉を奪い取る。
「これが成功したら、本当に海の歩き方教えてよ！」
「ああ、もちろん」
「絶対目にもの見せてやるんだから！」
そう言いながら、どこかに走り去っていった。それを見届けたうえで、俺は薫に向き直る。
「これでしばらくは大人しいだろ」
少なくともすぐには成功しないはずだ。五つのビー玉を均等の間隔で宙に浮かせるということは、五つのビー玉すべてに均等なチカラを割かなければいけないというこ

とでもあり、つまり相当なコントロール技術がいる。まあ、あれが出来ないようじゃ海の上で平衡感覚を保つのなんて無理だから、もしそうなら七海も諦めがつくだろう。
「賑やかな人ですよね、七海ちゃんって」
薫が可笑しそうに言った。
「騒がしいだけだって」
俺はさっきまでのやり取りが少しだけ恥ずかしくなって、そっぽを向いた。
「二人とも仲が良くて……ちょっとだけ羨ましいです」
薫は遠くを見つめながら言った。
薫はまだこの島に来て間もない。きっとどこかに、この島で生きていくことに不安を感じているんだろう。
「たぶんすぐ仲良くなれるさ、あいつもきっと淋しかったはずだから」
だから薫の不安が少しでも和らげばいいと、口に出していた。
「ただ歳の近い奴が他にいなかったから懐かれてるだけでさ。あいつにとっては、それだけの存在なんだよ、俺は」
薫が来たことで、七海に対する俺の役目は終わった。それに俺は、ずっと島に留まっていることはできない。
「俺はいつまでもこの島にいられるわけじゃない。だからさ、七海とこれからも仲良くしてやってくれないか」
でも、それを言ったとき、俺の中にぽっかりと穴が開いてしまったような、そんな気分になった。
本当は、目的のためには未練なんてものは切り捨てなくちゃならないはずなのに、たぶんどこかにまだ巣食っているのだ。この島の、俺の記憶の断片が。
「そんなこと、言わないでください」
薫の声が耳に響いた。見ると薫は、俺をただ見据えていた。
「和臣さんは七海ちゃんにとって、大切な存在なんです。それなのに、どうして……そんな悲しいこと言うんですか」
薫の瞳は余りにも透いて見えた。
「和臣さんが背負っているものが何なのかは私には分からないです。でも、なにもかも一人で背負い込もうとしているのだけは、私にも分かります」
全部見透かされているようだった。
「良かったら私に話してくれませんか？　何があったのかを」
誰かに聞いて欲しい。この感情は、ただの独り善がりにすぎないのではないだろうか。でもなぜだか、この子になら話しても良いような気がしている。
だけど何から話したらいいのだろう。
俺は悩んだ末、ある男のことから話を始めることにした。

「……外の世界にいたなら、国際手配されてる水原志郎(みずはらしろう)って男は聞いたことあるだろ？」
「えと、はい」
魔術者解放を目的としたテロ組織、そのリーダーである男。
「その男は、七海の父親なんだ――」

そろそろ太陽が西に傾き始めた頃。
木漏れ日に差し込むオレンジ色の光が、辺りをまだらに染め上げている。
引き続いて俺と薫と、そして七海は、薫の家の軒下で魔法の特訓をしていた。
七海は縁側に寝そべってくつろいでいる。昨日までのやる気はどこへやら、昼間までにはほとんどおざなりになって、今はもう練習を再開しようという気配すらない。
いっぽう薫は午前中に増して集中して練習に取り組んでいた。時折ビー玉が左右に揺れたりしている。このぶんなら近いうちに次の段階に移れるかもしれない。
「ねー和くん、ひまー」
七海がビー玉を玩びながら言った。
「早く海の歩き方教えてよー」
「俺が言ったやつはできるようになったのか？」
「……できてないけど。七海はきっと実践で身に付けるタイプなんだよ」
頭を抱えるしかなかった。なんて忍耐力のない奴なのだろう。もう少し大人しくしていても良かったのに、俺の見込みが甘かった。
「なんかさー、違うことしようよー」
「ひとりでどこにでも行けばいいじゃねーか」
俺がそう言うと、七海はヘソを曲げる。
「別に和くんに言ってないし」
そして薫の肩を叩きながら言った。
「ねえねえ、薫ちゃん。あっちで遊ぼうよ」
「おい、薫は俺と――」
「私は別に構いませんよ」
薫が練習を中断して、俺を見つめていた。
俺は頭を掻いた。薫にそう言われては強くは言えない。別に俺も無理に魔法を教えているわけじゃないのだから。それに今はまだ魔法よりも、七海と打ち解けることに時間を割いたほうが良いのかもしれない。
「わかったよ、魔法は少しずつ練習していこう」
俺は手をひらひらと泳がせた。
「でも遊ぶって言ったって、何すんだよ」

聞くと、七海は考え込む。
「そうだなあ……」
そして何か思いついたらしく、表情に花が咲いた。
「そうだ、みんなで花火やろうよ！」
「花火？」
「うん、竹中さんとこのお店にまだ余ってたはずだから。それに、和くんだって花火なんてしばらくやってないでしょ？」
「ま、そりゃそうだけどさ」
監察官になってからは、花火どころか娯楽なんてものはほとんどなかった。自由に行動することも許されず、毎日を耐え抜くだけの日々だったのだから。
花火、最後にやったのはいつだっただろう。たぶんこの島を出る前、七海と二人でやったのが最後だ。
あの時も七海が突然やりたいって言い出して。俺は無理やりそれに突き合わされて。でも不思議と悪い気はしなかった。家の灯りが消えるまで、七海と二人で顔を突き合わせて、ずっと花火を眺めていた。
「薫はそれでいいのか？」
「はい、花火は私も好きですから」
薫の了承を得ると、七海は張り切った様子で言った。
「よおし、じゃあオジちゃんからありったけの花火貰ってくる！」
そして誰の声も待つことなく走って行ってしまった。
まったく本当に騒がしい奴だ。でもそれが七海らしさでもあって、それが俺にとっては救いなのだ。
「……俺たちも行こうか」
「あ、はい」
七海の姿が見えなくなってから遅れるように、俺と薫も歩き出した。

移動しているうちにいつの間にか、空に少しずつ夕闇が降り始めていた。それを昼間の暑さを残す海岸線に沿って、歩いてゆく。
俺は海の向こうを眺めた。水平線はもうすでに紺の煌めきに紛れて消えてしまっている。
「和臣さん」
薫が俺の名前を呼ぶ。
「ん、どうした？」
それに応えるのと同時に薫のほうを見る。薫は闇に溶けた水平線の向こうを眺めていた。
「あれから私、ずっと考えていたんです」
そしてそのまま、その向こうの何かをじっと見つめたまま、呟く。
「本当に自分は両親に捨てられてしまったのかなって」
その吐息にはまだ微かに戸惑いの色が残っていて、柔らかな風に乗って遠くに消える。
「私が魔法使いだと知ったときの親の顔は、今まで一緒に暮らしていて一度も見たことがなかった表情だったんです。もしかしたら和臣さんの言う通り、厄介な存在だと思われたのかもしれないって」
薫の両親は一体何を思ったのか。それは究極的には本人たちにしか分からない。
「でも、私は忘れることができないんです。この島に来る前に送っていた、両親と過ごしていた思い出を」
俺にとって親っていうものは、自分にとって忌まわしき過去でしかなかった。親は子供を裏切るものでしかないのだと。でも薫にとっても果たしてそうなのだろうか。
「私は、両親に嫌われてしまったのでしょうか」
「それは――」
「嫌われるわけないよ」
背後で声がした。
声をしたほうを振り向く。そこには七海が立っていた。
「魔法使いだったって、そうじゃなくたって、薫ちゃんは薫ちゃんじゃない。そんなことで大切な誰かとの関係が変わるはずなんてないよ」
七海は力強く言った。
「……そうでしょうか」
「そうだよ。きっと薫ちゃんのお父さんもお母さんも、薫ちゃんに会いたいって、思ってるはずだよ」
七海はなんでそこまではっきりとそれを肯定できるのだろう。俺みたいに失ったことがないからか？　俺みたいに裏切られたことがないからか？
いや、たぶん違う。七海は知っているんだ。大切な人との関係というものは、簡単に覆ることがないっていうことを。
「和くんもそう思うよね？」
「……ああ、そうだな」
俺は頷いた。
でも、だとしたら、なぜ俺たちの家族は、跡形もなく崩壊してしまったのだろう。
「それよりも、花火いっぱい貰ってきたから早くやろうよ！」
両手に抱えた花火のセットを掲げてみせてから、駆けだした。
「薫ちゃん早くおいでよ！　和くんはバケツに水汲んできて！」

「へいへい」
けど今はそんなこと考えても仕方がない。俺は俺の目的のために突き進むだけだ。残された道はもう限られてしまっているのだから。

俺が水を張ったバケツを持って戻ってくると、七海はすでに花火に火を付けていた。
「和くんおそい！」
「お前こそ勝手に始めてんじゃねーよ」
俺の言葉はお構いなしに、色とりどりの閃光が飛ぶ。
「すみません、もうちょと待とうよって言ったんですけど」
その閃光の影で、薫が申し訳なさそうに佇んでいる。
「気にすんな、いつものことだからさ」
俺はそう言って花火を二本取り出し、片方を薫に差し出した。
「せっかくだし俺たちもやろうぜ。こういうのは楽しんだもん勝ちだ」
薫が受け取ったのを確認して、自分の花火に火を付けた。
七海がやりたいなんて言い出さなかったらきっと花火なんてもう一生やることはなかっただろう。花火だけじゃない。この島に来なかったら、こんなにバカみたいにはしゃぐことすらできなかっただろう。だからせめてこの瞬間だけは、昔のままの自分でありたいと思った。

いつの間にか花火は減り続け、ついに残すところは線香花火だけになっていた。
「そろそろ終わりだな」
「ね、和くん」
七海が俺のほうに近づいてきた。
「最後に勝負しようよ、どっちが長く線香花火を続けられるか」
そう言って線香花火を差し出す。俺にはその姿が、なぜか子供の頃の七海の姿と被って見えた。
「ああ」
俺は七海から花火を受け取る。そしてそれに火を付け、その場にしゃがみ込んだ。
「子供の頃みたいだな」
思わず言葉になって出ていた。
「え？」
「こうやって勝負しただろ、子供の頃も」
どっちが長く花火を続けられるか言い争いになって、じゃあどっちが上手いか勝負しようということになって。
「憶えてたんだ」
「まあ、なんとなくだけどな」
「じゃあ、その後の約束、憶えてる？」
「約束？」
そう言って七海は海を眺めた。俺もそれに従って海を見る。
「世界中の海を見せてくれるって約束」
「なんじゃそりゃ」
「憶えてないの？」
「さっぱりだ」
「お母さんに、世界には七つの海があるって教わって、それを和くんに言ったら、じゃあ俺が連れて行ってやるからって」
「そんなこと本当に言ったか？」
「絶対連れてってやるって、言ってたのに」
「時効だろ、そんなもん」
「和くんの、ばか」
七海がむくれる。その姿が余りにも昔のまんまで、俺にはそれが可笑しくて仕方がなかった。
「笑うなぁ……」
「まあ、気が向いたら連れて行ってやるよ」
「……うん」
と、その時線香花火の灯が、二人同時に落ちる。
「引き分けだな」
「そうだね」
「そろそろ片付けようか」
帰る支度をしようと立ち上がる。
「……ん？」
その時、俺の視界に何かが映る。それは光だった。ここから少し離れた海岸のほうから、何かがぼうっと光を放っている。
「ちょっとそれ片付けておいてくれないか」
「ちょっと……！」
俺はその正体が気になって、光の先へと歩を進めた。
とはいえ、俺には何の光なのかおおよそ予想がついていた。近付いていくにつれて、その予想が確信に変わる。
「ちょっと待ってよー、片付け放ってどこ行くの？」
七海が俺の後に付いてきていたらしく、俺が立ち止まったのと同時に止まる。
「ねえ、聞いてんの……って……」

そして俺の見ているものを見て目を見開く。
「……船？」
そう、船だった。そこまで大きくはない。定員十名程といったところだろう。先ほど見た光はコクピットに燈る明かりだったのだ。
定期船か？　いや、あり得ない。この島の定期船は数か月に一度しか来ないし、今日じゃない。そもそもこんな日が沈んだ時間に来るはずがない。じゃあこの船は一体。
すると、船の中から数名が降りてきた。そしてその中のとある人物の姿に、俺は思わず目を疑った。
「野呂……？」
「上司を呼び捨てとは、偉くなったものだな、真壁和臣」
野呂は見下すような眼差しで俺を見た。俺は咄嗟に七海を背後に隠す。
「和くん……？」
七海が心配そうに俺を見つめる。
「任務をサボってデートか？　……いや、よく見れば監察対象の水原七海じゃないか。つまり今も監察を続けていたというわけだ。精が出るな」
野呂は下卑た笑いを浮かべながら言った。こいつは知っていて言っているのだ、俺と七海の関係を。
怒りで我を忘れてしまいそうだった。しかしそれを寸でのところで留め、問いかける。
「野呂長官は、なぜここに」
「……なに、ただの野暮用だ」
「野暮用？」
その時、背後に気配を感じて振り返った。
そこにはスーツを纏った男が二人、立っていた。二人とも胸にエンブレムを付けており、一目で監察官だと分かる。そして、その二人に挟まれるようにして、もう一人――。
「――お母さんっ！」
七海が、この場にいた誰よりも早くそう叫んでいた。
真澄さんだった。
真澄さんは手に手錠を掛けられ、逃げることができないように両脇の監察官に腕を掴まれたまま、ぐったりとうなだれている。
「何なんだよこれは……」
無意識に声が漏れた。
だが野呂は俺の声が聞こえていないのかのように、ただ淡々とその言葉を紡いだ。
「水原真澄を危険思想所持の疑いで連行する」
「――ふざけんじゃねえっ！」
野呂がそれを言うのと同時に、俺は飛びかかった。
そばにいた男たちが野呂の前に立ちはだかる。俺はそれを魔法で押しのける。男たちはよろめいて、その場に次々と倒れこむ。
野呂まで一直線に道が開かれる。俺はこの手で、この男を殴ってやりたかった。殴らないと気が済まなかった。
なぜこの男はこうまでしてこの島の人々を傷付けようとするのか。いや、この際そんなことはいい。今はただ、この目の前の平然としている男に拳が届きさえすれば。
なのに、俺の拳は野呂への一歩手前でぴたりととまっていた。
「う、く……」
拳がそれ以上前に進まない。それどころか押されている。見えない何かが、俺の拳を押し返している。
俺の身体はその場でがくりと膝をついていた。
畜生、どうしてだ。目の前に憎い男の顔があるというのに。
「貴様は弱い」
野呂が俺を見下ろしながら言った。
「貴様は一人では何もできない、その程度の存在だ」
野呂の放った言葉が次々と耳に張り付く。
「もっと己の弱さを知れ」
俺はもう、顔を上げることができなかった。
「連れて行け」
野呂がそう言うと、真澄さんを連れた監察官が船内に乗り込んでいく。
そのまま俺は、その場から動けなくなっていた。もう追い縋っても無駄だということは分かっているから。振り返ることもできなかった。七海が今どんな思いでいるのかを知りたくなかったから。
俺はずっと、そのまま立ち尽くしていた。

空を見上げていた。どこまでも続く青空。あの空はどこまで続いているのだろう。もしもあの空に終わりがあるなら、空の先にはどんな優しい世界が存在するのだろう。
「――おーい！」
遠くで声が聞こえる。
「おーいったらおーい！」
だけど俺は応えない。この何もない海の上だけが、俺をひとりにさせてくれる唯一の場所だから。

「よおし」
間抜けな声が聞こえた。
だからひとりにしてくれって言ってるのに。
パシャパシャと水の跳ねる音が聞こえて、それがどんどん近付いてくる。
どうしてお前はいつも、そうなんだ。底抜けに明るくて、俺を元気付けようとする。
「捕まえた」
ひんやりとした手のひらが、俺の頬を挟んだ。
「どう？　少しだけなら海の上歩けるようになったんだよ、まだ不完全だから靴がべちょべちょになっちゃうけど」
どうしてお前は、いつもそう。もしかしたら自分の母親が死んじまうかもしれないのに。
「――なんでお前はいつもそうなんだよ！　悲しくないのかよ！」
「悲しいよ」
俺は七海の顔を見た。七海の目には涙が溜まっていた。
「悲しいに決まってんじゃん」
だけど七海は必死にそれを留めようと堪えていた。
「だけど、泣いたらそれ以外なにも出来なくなっちゃうから」
その声に涙の色がこもる。
俺は七海にこんなにも無理をさせていたのか。
俺はきっとその涙を止めて見せたくて、この言葉を口にした。
「俺、明日この島を出るよ」
「え……？」
七海は俺の言った意味が理解できないという顔をした。だから俺は、謝罪を口にする。
「ごめん」
「どうして？」
「ごめん」
「七海は、和くんと一緒に居たいだけなのに！」
「……ごめん」
七海の目じりから、涙がこぼれ落ちていた。
それまで涙を見せなかった七海の、初めて見せた涙だった。
俺はその涙が止まるまで、ずっと肩を抱きしめていた。

俺は故郷の島を出て、広い海を歩いてゆく。
その広い海の真ん中で、ある人間がぽつんと立っていた。
「お前は……」
その男は、野呂だった。
野呂は空を見上げながら呟いた。
「いつかこうなる気がしていた。お前が監察局に入局した時から」
俺は何も言わなかった。この男と話すことなんて何もないと思ったから。そのまま野呂の横を通り過ぎようとする。
「和臣」
だがすれ違う瞬間、俺は呼び止められた。
「お前、監察局を抜けるのか」
「……ああ」
肩越しに言葉を交わす。
「そうか」
野呂は顔を上げたままこちらを見ずに、そう感慨深げにつぶやいた。
「なら、もう私とお前が会うことはないかもしれんな」
「そうかもな」
その方が良い。俺はこの男の顔なんて二度と見たくはないのだから。
野呂は一度もこちらに振り向こうとはしなかった。
俺は野呂の顔を見ずに通り抜けた。
だけど通り抜けたところで、もう一度だけ声がする。
「最後にひとつだけ聞き流せ」
野呂は世界中の空を集めるように深く息を吸ってから、言った。
「私は今でも明穂とお前を愛している」
俺はこの男のことを認めない。俺たちを捨てて逃げた人間だから。でも。
「じゃあな、――親父」
最後に、そう呼んでやってもいいと思った。

俺はこの島を後にする。
魔法使いが自由に生きていける世界を手に入れるために。
――あの空と水平線が、世界を結んでいるように。

永遠の夢

林羽夢

私たちの住む世界は実に平凡でつまらない。学校に行って役に立たないお勉強をしなくてはならないし、一日の半分くらいの時間を働いて過ごさなくてはならない。子供の頃に持たされた夢や希望の苗木は、いつしかこの世界の秩序によって踏みにじられ、蕾のまま枯れてしまう。

さて、ご存じだろうか。この退屈な世界から一歩飛び出すと、そこには仕事も勉強もない素敵な魔法の世界があるのだということを。そこに住む人たちは皆真っ黒いローブを着て、木の枝でできた杖を持って、その杖をクルクルっと回して魔法を使うのだ。お鍋の火加減も魔法で変えられるし、デートに着ていく洋服も魔法で出せるし、欲しい物は何でも手に入る。私たちのようにつまらない色あせた毎日を送っている者からすれば、まさに夢のような世界である。

これは、そんな夢あふれる魔法の世界で生きる少女の、小さな小さな夢を描いた物語である。

少女の名前はメアといい、まだ十三歳になったばかりだ。今メアは、自分専用にあてがわれた小さな屋根裏部屋でしきりに魔法の杖を振っている。天井にはめ込まれた小さな四角いガラス窓からは、まだ夜を被ったままの眠たげな朝陽が顔をのぞかせていた。

小さなテーブルの上に置かれた空っぽの花瓶を薄明かりが照らす横で、メアは何度も同じ呪文を繰り返し、何度も同じ模様を空中に描く。その都度杖の先から出てくる細かな灰を見て、メアの顔はどんどん険しくなっていった。細く短い枝から作られた杖が乱暴に空気を混ぜるたび、足首まで垂れた黒いローブの裾がはためき、薄明るい光の中で床に積もった灰が舞い踊る。緩く波打った綺麗な金髪が灰によって白く染まることも気にせず、メアは杖を振り続けた。

いくら魔法の世界といえど、皆初めから魔法を使えるというわけではない。魔法の種類も多くあり、これら全てを自由に使えるようになるためには、小さい頃から杖を振って、何年も修練を重ねなければならないのだ。特に「自分の姿を変える魔法」は最難関と言われており、これさえできれば一人前と認められる。大抵の者は「自分の姿を変える魔法」を覚えるだけで五年、これを含めて全ての魔法を使えるようになるまでに二十年近くかかるので、例えばメアの年頃から魔法を覚え始めた人ならば、三十歳にならなければ立派な魔法使いにはなれない。

しかし中には想像を絶する覚悟と努力を以てして、十代のうちに自在に魔法を操れるようになる者がいる。その人々を、男なら魔法少年、女なら魔法少女と呼んでいるのだが、これは世界中の子供たちの憧れであった。多くの子供たちが魔法少年や魔法少女になりたがり、大小さまざまな努力をし、二十年を過ごしていく。運の良かった一握りだけが、自分の夢を叶えることが出来るのである。

メアも、その一握りに入ろうともがく子供の一人であった。彼女は三歳の頃から母親に魔法を教え込まれ、それから毎日欠かさず魔法の練習を続け、周りの子供たちがぐっすり眠っている時に起きてはこうして杖を振るっているのである。

周りの大人たちはそんなメアを褒め称え、母親も自慢の娘だと言って紹介し、友達は口をそろえて、メアなら魔法少女になれると言う。そしてメア自身、自分の熱心さを誇りに思っていたし、自分ならば魔法少女になれると信じて疑うことはなかった。そして事実、彼女は最難関である「自分の姿を変える魔法」を残して全ての魔法を操ることが出来るようになっていたのである。

しかし今朝、メアの杖は灰ばかりを出していた。起きてすぐに「自分の姿を変える魔法」を唱えようとした時、メアは自分の異変に気が付いた。この魔法は空中に紋を描いた後に、なりたい姿を強く念じながら杖を大きく一振りするものだ。杖を振った時には杖の先から虹色の火花が散るはずなのだが、綺麗に弧を描いた今朝のメアの杖はただ灰を落としただけだったのである。他の呪文を試したり、何度もやり直したりしたが、灰が床に積もっていくばかりでなんの解決にもならない。募っていくのは焦りと苛立ちばかりで、母親が朝食を運んで来た時に、とうとう泣き出してしまった。

「メア、大丈夫よ。ちょっと疲れているだけ。お散歩でもすれば元に戻るわ」

母親がこう言って、灰のせいで白くぼけたメアの髪を拭いてなだめてくれたので、朝食のトーストとトマトの輪切りを喉の奥に押し込むと、メアは何かに追われているかのように急ぎ足で外へ出かけた。

数分後、メアはよく友達と遊ぶ公園に来てベンチに腰かけていた。すっかり目

覚めた朝陽がうなだれるメアの金髪を和やかに照らす。メアにはかえって、この光が自分の憂鬱の影を濃くしているように思われた。
ここは遊具が少ない広い公園で、今日も何人か小さな子供たちが走り回って遊んでいる。彼らはまだ魔法をやっていないのだろう、杖すら持っていない。
甲高い声をあげながら駆けている子供たちを見もせずに、メアは膝に置いた杖を握りしめていた。もしや、魔法が使えなくなる病気にかかってしまったのだろうか。魔法少女になるどころか、魔法使いにさえなれないのではないか。母親は大丈夫だと言っていたが、メアの中では不安が膨れ上がっていくばかりである。今まで築き上げてきた大きな城が柱から腐り落ちていくのを、眺めているような気分になった。
「どうしたの」
突然、頭上から声がした。顔をあげてみると、長い杖を携えた大人の女の人であった。笑った時にできる顔のしわが優しく、歳を感じさせないような愛らしさがある。メアが答えようとすると、女の人は片手でそれを制しイタズラっぽく笑った。
「待って、当ててあげる」
そう言うと女の人は、黒いローブの下で腕組みをして考える素振りを見せた。腰のあたりまで伸びた髪の毛が優しい風に撫でられて軽く揺れるのを、メアはぼんやりと見つめていた。
やがて、女の人は目を輝かせて、立てた人差し指をメアの方に向けた。
「あ、分かった。自信をなくしちゃったんでしょ」
目尻に可愛らしいしわを寄せて笑う女の人の顔を、メアは思わず真正面から見た。自分の心の中を見透かされたような気がしたからだ。
「当たりって顔ね。隣、いい？」
メアが頷いて端の方にずれると、女の人は自分のローブを手繰り寄せながら横に腰かけた。彼女のローブは、今朝灰で汚れたメアの物よりも汚く、所々にほつれができている。
「魔法少女を目指しているの？」
雲一つない青空を仰ぎ見ながら、女の人は問いかける。メアも青空を見上げ、大きくうなずいた。
「実は私もなの」
可愛らしい笑いを含んだ声で、女の人が言う。それは冗談を言っているというよりも、恥じらいを持っていると捉えた方が良い口ぶりであった。
この女の人は確かに幼い雰囲気はあるが、その背格好はすらりとした大人のものであったし、杖はメアの母親とお揃いで大人用の長いものだ。「この杖は二十歳になった証として偉い魔法使いからプレゼントされるものなのよ」と、前に母親がメアに語ったことがある。魔法少女や魔法少年になれた人は、この長い杖に金の装飾があしらわれたものをプレゼントされるのだということもその時に聞いたことだ。女の人の杖は黒みのある茶色一色で覆われていて、金色など少しも見えない。
メアの戸惑いを察したか、女の人は流れる雲を目で追いながら口を開いた。
「大人なのに魔法少女を目指してるなんて、変でしょう。でも私は本気なのよ」
遠くから子供たちの声が聞こえる。メアは青空を見上げる女の人の横顔を見つめた。陽に照らされた頬は色つやが良く、目を覆いたくなるほどに輝いている。やがて女の人はメアを振り返って肩をすくめて見せた。その仕草と笑顔がなんとも可愛らしく、メアもつられて笑顔になる。
「いい笑顔じゃない。そう、子供は笑顔が一番よ」
女の人に優しく言われ、メアは自分の頬が熱くなるのを感じた。笑顔を褒められたのはいつぶりだろうか、いや、むしろ最後に顔を綻ばせたのはいつだろう。毎日魔法の修行に追われ、ろくに笑っていなかったかもしれない。
「あなた、いくつ？」
女の人から疑問が投げかけられた。十三だと答えると、女の人は興味深げに頷いた。
「ああ、そのくらいの歳が一番大変ね。私も苦労したもの」
女の人はまた青空を見上げ、懐かしそうに目を細めた。
「私はね、とっても真面目な子供だったの。毎日のように魔法の修行をしてね、あなたぐらいの時は確かほとんど魔法が使えてたはずよ。あの姿を変える魔法を残してね」

メアは目を見張った。なんという偶然の一致か。驚くと同時に、飛び出してきた灰塗れの屋根裏部屋が脳裏によぎり、悔しさが再び溢れそうになるのをぐっとこらえた。女の人は青空から目を離さずに、メアの柔らかい金髪を優しく撫で始めた。髪をすくように撫でる手が温かく、妙に安心感を覚える。

「でね、その姿を変える魔法を練習していた頃かしら。急に魔法が使えなくなっちゃったの」

涙をこらえるためにうつむいていたメアは、女の人の言葉にハッとして顔を上げた。髪を優しく撫でる手は相変わらず温かい。

「杖から灰が出てきてね、魔法が使えないの。その状態は何年も続いてね、気が付けば二十歳になっていた。でもほら、今はこの通り」

髪を撫でていた手を離すと、もう片方の手に持った杖を軽く振った。杖の先に小さな炎が灯る。これは基本中の基本である「炎の魔法」である。メアは自分の短い杖を見た。今の自分には、この魔法すらできないのだ。

「どうやって灰から脱出したか分かる？」

女の人の問いに、メアは答えることができなかった。それが分からないからこそ、今どうすることもできないでいるのだ。

いつの間にか子供の声は聞こえなくなっていた。子供たちがどこかへ行ってしまったのか、それともメアたちが遠い所に来てしまったのか、変わらず二人を照らし続ける朝陽だけがその答えを知っているのだろう。

メアが自分の杖を見つめたまま何も言えずにいると、女の人は立ち上がって言った。

「ちょっと考えを変えるだけでよかったの」

メアは再び顔を上げた。女の人はいつの間にやらメアの前に立っていて、長い髪の毛を風に任せている。特に気にしていなかったが、彼女の髪の色もメアと同じ鮮やかな金色だった。昼に向かって昇る太陽が、女の人の頭からつま先までを濃い白で包み込んだ。

「夢は、叶えるためにあるんじゃない」

そう言ってはにかんだ女の人の目が、不思議そうに首をかしげるメアの目を捉える。

「夢は見るためにあるのよ」

女の人はしっかりと、一言一言をメアの心に刻み込んでいった。刻み込まれた言葉達は新たな石材となって、誇りでできた壊れかけの城を組み直していく。呆然とするメアに、女の人は新たな言葉の石材を送った。

「叶えるために完全燃焼してちゃ、夢見る力が無くなっちゃうでしょう」

そうか。なるほど。心の内で工事を始めた城が元の姿を取り戻していく。メアは今まで魔法少女になることだけを考えて毎日を送っていた。もしかしたら、夢を叶える前に完全燃焼してしまっていたのではないか。灰はその燃えカスなのではないか。

女の人はもう一度メアの瞳を強く捉えると、顔に可愛らしいしわを作って手を振った。

「じゃあ私、そろそろ行くね。お互い頑張りましょう」

そう言った女の人が呪文を唱えて姿を消してしまうまで、メアは手を振り返すのも忘れて、彼女の言葉を胸の奥で反復していた。

（夢は見るためにあるのよ）

淡い朝陽だったものはいつの間にか強い日差しを地上に投げかけていて、途絶えていた子供の声が公園から遠ざかっていくのが聞こえる。膝の上で握りしめたままだった杖を腰の入れ物に収めると、メアも子供たちの後を追うように歩き出した。

公園の入り口には、目の覚めるような色をしたたんぽぽが咲いていた。今まで何度もここを訪れたが、このたんぽぽはおろか地面に生えた草花すらまともに見たことがなかった。ただの雑草と思って踏みつけていたが、昼の日差しに輝くその花はメアの瞳に色濃く映った。

そうだ、これを屋根裏部屋の空っぽの花瓶に生けよう。その後で、床の灰をすっかり片づけて、お母さんの作ったパンケーキを食べよう。

風がメアの髪を撫で、光を波打たせる。自分でも驚くほどに心が澄んでいくのを感じながら、メアは手折ったたんぽぽを両手に包み、一人、明るく照らされた帰途を辿るのだった。

少女に声をかけてくれた女の人の正体は、私にもあなたにもメア自身にも分からない。

私に一つだけ言えることは、メアが二十歳の誕生日に金の装飾の輝く長い杖を貰ったということだけだ。

ステップはやめないで

八名井明

「ターン。アンド、ターン。そしてステップ」
「なんですか、それ」
「魔法の呪文。そしてステップ」
「ターンが」
「そう。ターンが」
窓越しの夕暮れをスクリーンにしているようだった。ただの廊下だのに、彼女がステップを踏むだけで愉快な舞台にでもなっているかのよう。彼女はそういう人だった。
二つの黒いおさげが揺れている。地味を選んでいるわけではないが、彼女は決してアクセサリーの類を身につけようとはしなかった。漆黒の髪と同じ色のヘアゴムで柔らかそうな髪を結んでいた。まつげも黒ければ、瞳も黒い。制服も紺色のセーラー服なので、彼女の色はほとんどが黒だ。唯一赤いリボンだけが、暗幕できっと目立つだろう。
橙色の背景を背負った彼女はニヒルに笑う。すべてを見下しているような態度をとることでも、有名だった。「島村涼子は学内のボスだ」とはよく言った話で、彼女自身にはそのようなつもりも振る舞いも存在していない。ただ、彼女の雰囲気が勝手にそうさせていた。
見下しているのではない。まるで期待をしていないような目で他人を見る。だから見下されているのではないかと疑う人が登場する。紛れもなく彼女は被害者だ。勝手な妄想に付き合わされている。涼子にしてみれば、そのように振舞ってすらいないのだし勘違いされる筋合いもないのだろう。
彼女の、周りを気にしない態度も要因の一つだったのだろう。のびのびとした動き。言葉はひたすらに難解で、他者に理解を求めていないようだった。
「ねえ！　矢木さん！」
孤高の涼子に付き合っているのは後輩の矢木美砂子だった。美砂子は涼子に憧れていた。しかしそれはとうの昔の話である。憧憬が何故、憧憬で終わらなかったのかと美砂子は後悔していた。
涼子さんのように、孤高でも胸をしゃんと張って立ち続けられれば、大人になれていると思っていたのだ。涼子は美奈子にとって美の権化とも言えるような人だった。子供ながらにして、大人。理想の女学生だった。
「あなたも回ってみせて！」
だが口を開けば無茶難題を告げる大砲だった。活動的でない美砂子は涼子の体力の多さに圧倒されてしまっている。涼子は全てにおいて平均以上だった。いちいち涼子に合わせては耐えられないと人々は言う。
それでも美砂子は諦めたくなかったのだ。憧れの傍に行き、見つめることを。
美奈子は苦い顔をしながら見様見真似で回る。バレエを基盤にしているのか涼子は片足で回っていたし、優雅に腕を広げて舞もしていたように思う。恐ろしく器用な女性だ。
涼子に倣って回った美奈子は足をつっかえる。
「あらあら崩れちゃったのね」
責めるような言い方をしているが涼子に美砂子を非難しようという気持ちは無い。涼子からしてみれば、自分はただ美奈子に起きた事実を語っているに過ぎないのである。美砂子はそれを理解していたので、どんなに辛辣なことを言われようと泣かずに踏ん張ってきた。追い討ちのようなことを言われないのが救いだ。
何があろうと事実しか話さない。
観察をしているとは思えない。たまたまそこに居合わせたがために、彼女はそれを口にしているだけなのだと美奈子は思っている。
だからこそ人を追い詰めているとも思う。何度泣かされそうになったことやら。
美砂子は歯を食いしばりながら立ち上がった。彼女の背後には、自分のことを可哀想と言わんばかりの表情で見つめている警備員の姿が見えた。可哀想などとはよく言えたもので、美奈子が自らそのようにしているのだから、本当に他人の無知は愚かである。
まるで首を絞めるかのような出来事に毎度付き合わされているのは否定のしようがなかった。
「矢木さん」
「はい」
「立ちましょう。埃がついてしまうから」
「……はい」
「それからもっと話しましょう。例えば、化粧の話だとか」
「化粧？　島村さんはするのですか？」
「いいえ。あんな魔法には頼りません」
彼女の語りは淡々としている。
事実だけを述べるので自分に関連する話しかできない。今日は何がありました、明日はあれをします。と涼子がほぼ一方的に話していく。また、彼女はよく歩きながら語っている。歩きながら語ることによって、それらしさというものが増える。意識してそれを行っていないのだろう。彼女は本当に様々なものに長けていた。
廊下を通り、階段を下り、昇降口へ向かう。学年が異なっていても、涼子は大きな声をゆっくりと出しては語りを続けた。
彼女の語りに美砂子は何も言わない。適当な相槌を打ってやるだけである。事実を述べているだけの語りに、突っ込む気にはなれなかった。むしろ彼女の語りに耳をすませることで、涼子の謎解明に努めていたのである。

美砂子の思う涼子の謎とは、彼女の魅力の根元についてなのだが、ほぼそれはわかりきっていると言っても過言ではない。美砂子が認めさえすればいいだけのことである。そして、なんと面倒なことか、美砂子はその答えを知っているはずなのである。

「矢木さん、矢木美砂子さん」

「はい」

「帰りましょう。話しながら」

すっと涼子が美砂子の隣に移動する。彼女は先に靴を履き終えていた。そして、涼子は自分と同じ色をしている制服の、美砂子のセーラー服の裾を掴む。

動き始めたのは美砂子だった。美砂子の服の裾を掴んでいる涼子は、彼女が動くことで移動を行っている。美砂子を綱にしているかのように。まるで犬だ。首輪から伸びる綱によって引きずられている、歩く意志の存在しない犬。

美砂子は涼子が手を放すまで待っていた。涼子は結局、手を放すことはなかった。

黒い眼が美砂子を見つめている。帰り際、その手を放す瞬間に、僅かに涼子の瞳が揺れていた。別れを惜しむ子供のようだった。後ろ髪を引かれるような思いを、何度も美砂子は経験している。いつも彼女はこうして魔法をかける。

魔法に頼らないと言っているくせに彼女は呪文を行使する。

涼子は大人なのではない。ひたすらに子供なのだ。嘘のつけない純粋な子供で、事実をおうむ返し、又は確認するかのように伝えることしかできない。底知れぬその子供らしさに、皆が怯えている。

「ターン。そしてターン」

彼女が口ずさむ呪文を唱えると、心がはずむのはどうしてだろうか。憧れるのはどうしてだろうか。まだ美砂子は認めようとしていない。憧れの大人が、どこまでも子供であること。その事実から目を逸らすために。

「それではさようなら、矢木さん」

「ええ。さようなら」

彼女は涼子の目を見ることが出来なかった。漆黒のそれは、美砂子を引きずり込むには黒すぎていた。

翌日。

涼子は奇怪な行動を起こす。それは何が発端かわからぬもので、そもそも奇怪行動と見做されているのだから理由がわかることの方が少ないのだが、彼女はまた理由もなしにくるくると回っていた。

島村涼子がステップを踏む。

御伽噺の王様が登場したかのように、人々は驚き道を拓く。

廊下の中央を軽快に進む涼子と、平伏すかの如く廊下の両脇に収まる生徒たち。生徒たちに僅かに紛れ込んだ教師でさえも、彼女を止める力量を持ってはいなかった。

純真無垢に、ただ回ることだけを楽しんでいる人物をどのように止められようか。

大勢の人々を巻き込むわけでもなく、涼子は自分の楽しみというものを満喫しているだけである。自分が楽しむために読書をしているのと同じ。彼女は彼女の楽しみのために、優雅に舞っているのである。異なる部分があるとするならば、それは読書と異なりパーソナルスペースが極端に大きくなってしまうことだろうか。だとしても、涼子を止める人物など一人も居なかった。

その光景に、美砂子は呆れていた。

帰宅する準備を終え、掃除当番の仕事をこなした彼女に残された仕事と言えば、本当に帰るだけだったのだ。それがどうして、邪魔されている。今日も目立つところが赤いリボンしかない島村涼子、自分が憧れているその人物に。

聞くところによれば涼子は美砂子を待っていたのだと言う。彼女が舞台にしていた場所は美砂子の教室前こそ通らなかったものの、周辺としては正しい道筋であった。だから少しだけ騒々しかったのかもしれない。

島村涼子は誰でも知っている。

彼女の黒さ故か、それとも相反する肌の色を目印としているためか。そのどちらもか。または赤い印が、わかりやすくしているのか。夏には制服も爽やかなものに代わり、ポロシャツの着用が求められている。ポロシャツの色は可愛らしい薄桃色のはずであるのに、彼女が着ると彩度が落ちてしまうのだと美術の先生は言う。本当にそうなっていたとしたら、島村涼子という学生は、もはや子供と表現してはいけないのかもしれぬ。

その場に居るだけで掻き回すような、それでいて他意のないものならば、どんなに酷い所業なのだろう。美砂子はそう考えた。

目の前に居る涼子は回ることをやめて微笑みもせず、美砂子を観察している。じっと、見つめ続けている。ただそれだけだと言うのに圧迫感を与えていた。

「矢木さん、矢木さん」

「はい」

彼女はどうして自分のことをここまで熱心に待っていてくれているのだろうか。確かに美砂子が涼子に接近し始めたのがきっかけなのだが、それは美砂子が涼子に興味を持ったからであって、涼子の方には何も無い。理由が無いような気がしてならない。もしかしたら、関わっていくうちにどこかで興味が湧いたのかもしれないが、それにしては熱心すぎる。

観察しているだけの瞳は大きい。人が恐れるのも無理はない。彼女はなんの感情も込めずにこちらを見ているだけなのだ。

美砂子は美砂子で、そんな涼子のことをまだ慕っている。やはり、憧れてしまっていたのだった。彼女特有の雰囲気などに、彼女を取り巻くそれらに。

「遊びましょう」
「ターン、ターン」
「そう。回りましょう」
鞄を片手に器用に回っていたのだろう。辺りに居る人に目もくれず、しかし被害を与えずに。どこまでも上手い人物だ。自由奔放にしていながら咎められないのはそのおかげだろう。
気が付くと美砂子は魔法の呪文を唱えていた。
ターン、ターン。この繰り返しが呪文なのであって、残されたステップの部分はなんの意味も持たないのだと言う。
回ることを繰り返す涼子は、美砂子が頷いたのを見てまた回し出した。廊下を、階段を、踊り場を舞台に舞う。回っていく。
本当に優雅だった。おさげが揺れて、しなやかに手足が伸びる。やはり、バレエの心得もあるのだろうか。美砂子は思ったが本人の口からバレエに関する事柄は全くと言っていいほど聞いたことがなかった。
こうも考えている間にも涼子はステップを重ね、美砂子の視界を移動し続ける。
「し、島村さん！」
「ほら、矢木さん早く！」
「待ってください！」
待てと言って待つような人物でないことを知っていながら、待ってとお願いをするのは野暮ったいことだと美砂子は思った。
二人は昨日よりもはるかに多い観客たちの視線をくぐり、進んでいく。先行する涼子によって拓かれた道を、必死に美砂子が辿っていった。涼子は足も早い。動くのが苦手な美砂子が追い付くのは到底無理な話だった。しかも涼子は舞っているだけだというのに、それでも追い付けないのだから、持っているものの違いを思い知らされる。
羽よりも軽そうな足取り、そのステップでさらに上の階へ。
いつの間にか二人は屋上前の扉に来ていた。彼女たちの通う学校では、屋上は危険だからと開放されていない。
「閉まっています」
「はい」
「今日はここで話しましょう」
涼子は踊り場に積み上げられている椅子を二つ下ろし、埃を払ってからそれに座った。ご丁寧にも彼女はその二つがしっかりと向き合うように設置をしている。
――今日も逃げられない。
元より逃げるつもりがあったのか、と美砂子は自分に問うたが答えは出なかった。
「話しましょう」
「はい」
今日も彼女に付き合わねばならないことの苦渋というものは、あまり美砂子は感じていない。あるとするならば、わかりそうでわかりたくない島村涼子の本質についてだ。
関わっていくと、隠そうとしない限り見えてしまう人間の性格、態度というものは如実に人というものを語っている。
徐々にではあるが美砂子は涼子に関するそれらを理解してきたのである。
島村涼子は子供である。
ネバーランドの住民と言っても過言ではないだろう。彼女は、確かに知恵こそつけているもののやっていることは子供のそれだ。
わからないものを観察する。
人に語るものは見聞きしたそれに限る。
それは子供のようではないか、と美砂子は思った。
大人だと思っていたものが、実は子供の堂々巡りであったことの失望感の方が絶大なものだった。
「島村さん」
「はい」
「私と一緒で楽しいのですか」
面談のように向かい合っているので、聞きやすかったのかもしれない。美砂子は、一番気になっていることを口にした。
「ええ。楽しいですよ」
美砂子はありがとう、と答える。しかしもう彼女の目は、涼子を追っていない。追うどころか、涼子のことを見下しているかのような感覚に陥っていた。
涼子の目は、輝きもしていない。
そう答えることで一緒に居てくれることを覚えている、だから反復しているような、そんな目の色をしていた。そうでないにせよ、彼女の瞳の色は黒い。どこまでも黒い。読み取るのは簡単なことではないだろう。
すっと立ち上がり、美砂子は手早く椅子を片付け始める。気がつけば話しこんでいた。もう、夕暮れ時になっている。
「帰りましょう、島村さん」
「ええ。ええ。そうですね」
このとき始めて美砂子は涼子に手を伸ばした。
「矢木さん？」
「帰りましょう」
加えて、このときほど美砂子は涼子に対して冷たいまなざしを向けた日は無かった。

　またしても手綱にされている、と美砂子は掴まれている腕を感じながら歩いている。赤い夕焼けはいつの間にか雲によって覆い隠され、今にも雨が降りそうな具合となっている。「天気予報のほら吹きめ」と愚痴を吐くスーツを着込んだ男性が美砂子の肩にぶつかったが、彼女は何も言わなかった。同じように、涼子も何も言わなかった。
「矢木さん、矢木さん」
「はい」
「こちらを向いて」
「……そこの、横断歩道を渡ってからでいいでしょうか」
「なら、話をしましょう」
「はい」
「私は、メリーゴーランドが好きです。観覧車も好きです」
「私も好きでした」
「ええ、ええ。そうでしょう。回り続けるものは、素敵でしょう」
「そうでしょうね」
　信号が赤から青に変化するのは、絶妙なタイミングだった。二人が渡ろうとした瞬間に、ぱちりと切り替わったのである。
「矢木さん」
「はい」
「こちらを向いて」
　涼子は美砂子の言った通り、渡り切ってから再度彼女のことを呼んだ。美砂子もそれに応じる。
　黒い眼が、珍しく色を魅せている。
「ねえ、矢木さん」
　風が吹いた。その冷たさから冬はもう間近なのだと感じる。気がつけばすぐに春が来るのだろう。
「私、春になったら卒業してしまいます。ですから、矢木さん」
　――ご友人になって。
　――それを言うならご都合主義でしょう、島村さん。
　この我儘も、全て子供の戯言だとわかってしまっているのだから、どんなに可愛らしいものか。
　美砂子は心の中で呪文を呟く。ターン、ターン。
　その魔法は春には解けてしまうだろう。まるで雪のように、あっさりと痕も残さず。

Ｊｅｗｅｌｓ

はるゆかり

ロマンティックな音楽が流れる。夢のようなコール・ド・バレエのゆらめき。優しく勇敢な王子が傍らで見守る。その中心で夜空の月のように輝くお姫さま、それがプリンシパルバレエダンサーだ。観る者はその柔らかな全身の動きから緊張など感じ取れない。だがバレエダンサーは、身体の端から端まで緊張させることで芸術を作り上げている。

バレエの基本は、下肢全体を股関節から開くアンドゥオールと身体の軸を引き上げるエレヴァシオンだ。アンドゥオールで前後左右の移動を自由にし、エレヴァシオンは上方への広がりの表現につながる。そのため、この二つは全ての動きの根源となる。高度に様式化された身体表現のために、ダンサーは毎日何時間も基本動作を体にすり込んでいる。もう数十年来、一日も踊らない日がないというダンサーもいる。

繰り返し訓練を行うことは仕事や勉強においても必要なので、誰でも日常的に行っている。「慣れ」という言葉で表されることもあるが、スポーツや芸術には「鍛錬」というさらに厳しさが増した言葉がふさわしくなる。

例えば、皆一度は経験があるはずの「歌う」ということで考えてみると、人前で歌うと普通は実力の半分以下の力しか発揮できない。それは、極度に緊張することで発声器官を支える筋肉が上手く作動しなくなり、声のコントロールができなくなってしまうからだ。

プロの歌手は発声の過程を練習で体に覚え込ませる。無意識にできるように何度も何度も。そして舞台に立つ。やはり手が冷たくなり、足が震え、心臓がバクバクする。それでも音楽が流れれば、いつも通りに声が出る。それはもはやただの歌声でなく、限りなく美しい天上の音楽となってホールに響き渡る。プロは決して緊張しないのではない。緊張で失敗しないように鍛錬しているのだ。

さてバレエに話を戻すと、プリンシパルダンサーが素晴らしいのは、単に回転が速いとか跳躍が高いだけで終わっていないことだ。舞台ではスピン、ジャンプ、ポーズに移行するときの動きにも美を表現しなければならない。そうしないと、部分部分でどんなに素晴らしいパフォーマンスをしても、雑でしまりのない印象を持たれてしまう。何より登場人物の感情が伝わらないので、観客はストーリーに入り込めず感動が薄くなってしまうのだ。

しかしここまで求めてしまうと、多分に踊り手のセンスすなわち才能に依るところが大きくなる。

世界的バレエダンサーには、生まれ持った身体のラインの美しさと優れた身体能力が必要だ。ロシアのワガノワバレエ学校では、入学試験で身体機能がバレエ向きかどうかを検討するのだが、何しろ10歳の子供なので未来予想図を描かなければいけない。校長は、そこが大変難しいと言う。母親がワガノワの卒業生や、ワガノワの優等生も入団するマリインスキーバレエ団のダンサーだという生徒もいる。親が身をもって証明するということだろうか。ロシアでは、バレエは日本の伝統芸能のように世襲を優遇したい気持ちがあるのかもしれない。

もう一つ必須条件として、表現力や音楽性など芸術的に鋭い感性を有するかどうかということが挙げられる。ただ、これは鑑賞者の好みや造詣の深さに依るところも大きいので、判断が極めて難しくなる。

芸術作品と表現者と鑑賞者はいつでも三角関係にある。表現者と作品との関係は確固たるものだが、鑑賞者と作品の関係は曖昧だ。だが、芸術作品には鑑賞者が不可欠である。受け手の質の良し悪しが、作品の価値に大きく関わってくるのは世の常だが、その評価というものが作品すなわち芸術の向上の一助となることもあるのだ。世界的バレエダンサー熊川哲也が語っていたように、表現者が芸術の敷居を下げるのでなく鑑賞者が芸術まで上がれば、評価される芸術の質も上がっていくはずだ。

さて、評価とは別に感銘するということについてだが、その芸術の経験があるかないかでとらえ方や感動の仕方も違ってくるだろう。だが芸術鑑賞に経験が必須条件になるわけではない。踊ったことはないがバレエ鑑賞が大好きで普段からうんちくを語っている人が、ある公演を観てひとすじの涙を流し、美しい…美しすぎる…とつぶやき、無言で帰路につく。その時、観る者は舞う者に魔法をかけられたのだ。シンデレラのように限られるからこそ美しい時間。その魔法は永久に解けることはない。

ロイヤルバレエの元プリンシパル、タマラ・ロホはお姫様、妖精から情婦までどんな役にでもなりきれる。私は彼女の踊るラ・シルフィードに感嘆した。シルフィードは空気の妖精で、婚約者のいる男を誘惑して夢中にさせ、結局その男に殺されてしまう。ストーリーはたわいもないが、バレエ作品としては由緒正しい大御所であり、不動の人気を誇っている。まず、シルフィードの衣装がかわいい。花冠に白い薄地のモスリン生地の衣装とピンクの繻子の靴。極めつけは、背中の丸い小さな羽だ。こんな姿で目の前をちょろちょろされれば、追いかけて捕まえて自分のものにしたくなるのが人情というものだ。

ラ・シルフィードは、クラシックバレエの歴史でいうと初期に確立したロマンティックバレエにあたり、重力の否定に中心を置くロマン主義芸術の典型例と言える。妖精の浮遊感を表現するために、ふわりと身体を引き上げて爪先立ちをすることで独特の空気を作り上げている。しかし、このシルフィードはふわふわ浮いているだけのお人形であってはならない。男を誘惑して殺されなければならないのだから、何しろ難しい役柄なのだ。そのあどけなさと妖艶さを併せ持つのがタマラ・ロホだから、それはもう魅力的なシルフィードだ。オードリー・ヘップバーンに似たキュートな面差しと、バレエ界ではぽっちゃりと言われる可愛らしい舞い姿は、永久に年を取らない妖精そのものだ。彼女はアラフォー世代だが、「アンチエイジング」は美白化粧品を厚塗

りした美魔女でなく、この人にこそ使うべき言葉だ。
　ウルトラE難度をこなす技巧派で有名だが、椿姫では年下の美青年を食べちゃうんじゃないかと思うほど濃厚なラブシーンもやってのける、大胆不敵な演技派でもある。彼女は頭の回転もいいらしく会話が面白い。ラ・バヤデールのヒロイン、ニキヤは毒蛇に咬まれて死ぬのだが、その時に使う小道具のゴムの蛇を生きているように扱うのが難しいと語っていた。「でも、本物だったらもっと困るんだけどね」と言って笑う姿はまるで少女のようだ。
　タマラ・ロホは生身の人間であり、オタクやおじさんの妄想から生まれる二次元の少女とは価値が違う。主体的に生きることで喜怒哀楽を体得している。責任を全て自分で背負って生きている人の放つ輝きは、人々を惹きつけてやまない。

　総合芸術が音楽、絵画、建築、舞踏など複数の芸術の混交によって創造される一つの統一的な芸術と定義されているなら、バレエは正統派の総合芸術だと言えるだろう。
　各分野の専門家のスキルを総動員して、その相乗効果によって作り上げた時空は、一つ間違えば途端にバランスを崩し、観客を落胆させる代物となる。だが、砂山の美しい姿形が保たれる物理的条件下と同じ緊張感を持つ舞台であれば、観客は夢の世界に浸りきることができる。
　その先導をする健気なプリンシパルは、時に強く、時に妖しく儚げに舞いながら観る人に全身で語りかけている。「夢の世界へようこそ。私はあなたに魔法をかけます。どうか私に心をあずけてください」と。

ジュゼッペじいさんと
マルコ少年の進化論

はるゆかり

プロローグ

もしもし、あぁエリーか。急にどうしたんだい。今晩の約束ならちゃんと覚えているよ。何回も言うけど、前のドタキャンは決して浮気じゃないからね。学会のせいなんだよ。私が一番愛しているのはエリーだけだからね。それと私の愛しいマルコは大学で上手くやれているだろうか。あの子はまだ十六歳だから心配なんだよ。あぁ、こんなことなら飛び級なんてさせるんじゃなかった。じじばかだって言われても構うもんか。孫という生き物は世界一可愛いものなんだ。エリーまさかマルコとデキているなんてことはないだろうね。おぉ、マルコが来たよ。じゃあね、エリー。

少年　おじいさんお茶が入りましたよ。音楽はロッシーニの泥棒かささぎでいいですか。

おじいさん　ありがとう、愛しい坊や。さて今日は何の話をしようかな。

少年　おじいさん、もう忘れてしまったのですか。今日は進化論の話でしょう。ぼく、昨日からずっと楽しみにしてたんですよ。だっておじいさんのお話は、ママよりもパパよりも学校の先生よりもいつも成績が一番の子よりもずっと面白いのだもの。

おじいさん　ははは、うれしい事を言ってくれるね。こんなちっぽけな老人の話を聞いてもらえるだけでもありがたいものだよ。だが愛しい坊や、これだけは忘れないでいて欲しい。私は年寄りで知識も豊富だ。周りの人たちが霞んで見えることもあるかもしれない。あぁ、愛しい坊や、それは上等な目くらましであって真実ではないのだよ。周りの人たちは今は至らない所や足りない所がたくさんあるかもしれない。しかしその人たちは将来、きっと坊やを助けてくれる人になるのだよ。決して驕った気持ちで接してはいけない。わかるね。

少年　わかってますよ。お話はおじいさんが一番面白いけど、お料理はママが一番おいしいし、釣りはパパが一番上手い。クラスで一番かわいいのはエリーちゃんだよ。彼女には大人のボーイフレンドがいるみたいだけど。それにぼくは飛び級したから、みんなと年が違ってあまり友達はいないんです。

おじいさん　坊やは本当に頭がいい。一言えば十わかる子だ。せっかくのブレイクなのに余計な事を言ってしまったね。許しておくれ。さぁ、アンナの作った世界一のアマレッティをお食べ。これで口直しをしてから今日の話を始めよう。

少年　わぁ、いただきます。今日のアマレッティはレモンピールが入っていて爽やかですね。それにサッセロ風なのもいいです。柔らかくて口の中でほろほろととけて、ハーブティーとすごく合ってます。

おじいさん　ははは、人生は変化があるからこそ最高なんだよ。だから愛しい坊や、変わることを恐れてはいけないよ。あのマリア・カラスでも声が枯れるのは早かったからね。オペラハウスにいた時は想像もつかなかったものだよ。あの美声には永遠を感じさせるものが確実にあった。私だってこんな皺くちゃになるなんて、坊やくらいの時には全く考えていなかったからね。

少年　ぼくは早く大人になりたいです。早く大人になって、フランコ・マレルバみたいな宇宙飛行士になりたいです。

おじいさん　そうかそうか。大志を抱くのはいいことだ。叶えられそうな夢を見るのはナンセンスだよ。夢は夢であるから素晴らしい。夢が人生をより豊かにしてくれる。さぁ、今日の話だ。坊やは分子生物学について知っているかな。

少年　細胞を分子レベルで研究する学問ですよね。ウォーレン・ウィーバーが提唱して、ワトソンとクリックが二重螺旋構造を解明してノーベル賞を取りました。でも本当はロザリンド・フランクリンが行ったX線の解析がこの構造の解明に多大な功績を残したんです。

おじいさん　素晴らしい。さすが私の孫だ。きっと世間の人々は坊やにこう言うだろう。君は天才だとね。しかし愛しい坊や、情報の羅列を述べるのはコンピューターでもできるんだよ。学問を述べる時には必ずポリシーや哲学が必要だということを忘れてはいけないよ。間違ったって構わないのさ。でも自然現象に思想を入れるとジュラシック・パークみたいになりますよ。それこそ自然科学に対する冒涜のように思えます。ぼくのポリシー

は敢えて客観的に自然科学を捉えることです。

おじいさん　それだ！愛しい坊や、それがポリシーや哲学と呼べるものなのだよ。何も頭でっかちに考えることはない。哲学の定義なんざ星の数程あって、知の宇宙に煌めいているんだよ。

少年　哲学って何かおっかない響きですね。

おじいさん　私も坊やの歳だった頃は乙女のような頑なさがあったね。大人でも子供でもない身体と心を持て余して、周りの優しさの中でどんどんダメになっていったものだよ。精神と身体と心の自由なしでは人間は生きられない。偏見や幻想を持たずに前向きに色々なものにチャレンジしなさい。

少年　そうですね。いつか合唱団の練習も楽しくなるんでしょうか。ママはオペラ歌手だけど、ぼくは歌はあまり好きじゃないんです。歌を歌う時間があればローマ天文台で星を見たいなぁ。

おじいさん　ははは、坊やは正直者だ。正直なのは美徳だよ。さっき言ったことは老人のおせっかいだと思って聞き流しておくれ。止めたくても止められない思いはたくさんある。私も昔はよく浮き名を流してね。アンナに何度殺されそうになったか。特にスペインからの留学生のカルメンはいい女だったよ。黒髪とエメラルドの瞳がとてもエキゾチックで性を感じさせていたね。中流階級の女は妙に気取った所がなくて頭の回転が早いから、随分深みにはまってしまったよ。女も実験も冒険がなくては面白味がない。ところで坊やは、進化においての用不用説と自然選択説あと中立説のどれを支持するかな。

少年　ぼくは自然選択説を支持しますね。

おじいさん　ほう、なぜかな。

少年　まず用不用説は、例えばキリンが高い所にある葉を食べようとして徐々に首が伸びてきたという考えです。ぼくは意思が直接遺伝子に働くというのが非論理的に思えるんです。しかしアフリカ大陸のピグミー族の低身長化や、ニュージーランドのオウム、カカポが飛べなくなった例もありますし、必ずしも間違っているというわけではないんでしょうけど。中立説はまぁ何というか面白い説だとは思いますよ。生存に有利でも不利でもないニュートラルな遺伝子が偶然集団の中に広がるというアイディアは斬新です。これを唱えたのは日本人の木村資生。彼はノーベル賞を取ってもおかしくない偉業を成したと思います。しかし説自体が難解で少し説得力に欠けますね。やっぱりぼくはダーウィンが唱えた自然選択説を支持しますね。変異が起きた遺伝子がその環境に適応したため、生存競争に勝ってそれが繰り返されて、次第に進化していくという説です。これは非常に優れた説ですよ。正に弱肉強食ですね。進化を行っているのは選ばれた遺伝子なんですよ。我々の遺伝子達が環境に有利になるように自分達を変化させていくなんてとても面白い。これは自然の理を理解しているダーウィンだからこそ唱えられる説です。ダーウィンの進化論はぼくのバイブルと言っても過言ではないです。おじいさんはどの説を支持しますか。

おじいさん　私は中立説を支持するかな。理由は簡単さ、私がこの説を気に入ってるってだけだよ。愛しい坊や、考えてごらん。どの説も正しいのだよ。どう裏付けて証明するかはその人しだいだからね。さっきも言ったが、あくまでも思想が大切なんだよ。ところで坊やは好きな人はいるのかい。

少年　なんですか突然。えぇ、いますよ。

おじいさん　ほう。だれかな。おじいさんにだけコッソリ教えておくれ。絶対にママやパパに言わないと約束するから。もしかしてエリーちゃんかな。

少年　違いますよ。エリーちゃんは憧れのマドンナみたいなものですから。好きな人とはそういうものじゃないでしょう。ぼくが思う好きな人というものは自分の心の中の一番美しい場所にいるんですよ。

おじいさん　その人とはまだ恋仲ではないのかい。

少年　まさか。恋人がいますよ。それも同じサークルの先輩なんです。

おじいさん　そうか。人間はいつまでも常春の場所にはいられないからね。夏の暑さや秋の虚しさ、冬の寒さを味わいながら大人になってゆくんだよ。おっ

と、ごめんよ、坊や、先約があってね。その話はまた今度じっくり聞こう。

エピローグ

ねぇローズ、君が何の花かわからないからそう呼ばせてね。ローズにしか話さないからよく聞いて。僕は今日初めて他人に好きな人のことを話したんだ。もちろん詳しくは言ってないよ。だって話し相手はおじいさんだからね。本当のことなんて言ったら心臓発作で倒れてしまうよ。それに僕は一生この恋を誰かに打ち明けるつもりはないしね。ローズは花だからわからないだろうけど、好きな人と堂々と愛を語り合えたらどんなに素晴らしいだろう。時には笑い、時には憎み、比翼の鳥や連理の枝のようにいつまでも二人でいられたらどんなに幸せだろう。でもそれは一生叶わない。わかってる。ローズ、僕はね、男が好きなんだ。もちろん男なら誰でもってわけじゃないよ。大学に入学してすぐにケイっていう日本人の留学生に心を奪われたんだ。一目見た時から僕はケイに夢中になったよ。でも彼はノーマルだと思ったから、お行儀のいい親友を演じていたんだ。それからは毎日地獄のようだったよ。恋人として触れたいのに友人としてしか触れられないこの苦しさがわかるかい。どんなに手が届きそうでも決して届かない月のような彼の横顔を見ていた時の気持ちが。あの美しい黒髪、象牙色の肌、星の欠片のようにぽつんと輝く泣きぼくろ。それでも僕は彼にガールフレンドができたらちょっと茶化しながら祝福するつもりだった。そんな風にこの恋に決着をつけようとしていたのに、見てしまったんだ。講義室でユウスケがケイの髪を撫でているところをね。もちろんショックを受けたよ。愛してる人が信頼する先輩となんてね。しかも同性の。でもね、ローズ、ショックよりも嬉しそうにはにかんでる彼の顔にときめいてしまったんだよ。高揚してピンク色になった頬に思わずキスをしたくなったんだ。僕は諦めようとしたよ。しかしこの思いは燃え上がる一方なんだ。そしてその日から僕は教会に行ってないんだ。何をしたというわけではないのにね。でも罪悪感がそうさせているっていうことが僕にはわかる。けどねローズ、例え今は叶わなくても、状況は変化し続けるんだ。進化論のように少しずつ目に見えない変化が起こっているんだ。だから僕は絶対に諦めないよ。ふふ、ちょっと喋り過ぎたかな。じゃあね、ローズ。

さよならサンクチュアリ

八名井明

今日も今日とて学校に通うのに気怠さを感じているのは、あたしが学校嫌いだからではなく、なんだかやるせなさを覚えているからだった。学校ではなくあたしに。
あたしとはなんなのだろうとアイデンティティに対して疑問を持つのは高校生らしいのかしらん。ううん、あたしは別に高校生らしさを求めているわけではないの。ただ考えているだけなの。そんなこと考えてすらいないの。
学校に近づくにつれて女子の会話の弾むこと。同じスカートだのに丈が違うのは競争心があるから。カーディガンに個性を求めてしまうのは、きっとそれで自分を覚えてくれる人が居るから。目立つほど記憶に残りやすい。残らない子は消えていく。
空はうんざりするほどの快晴で、秋の日差しだった。柔らかく、照りつけることのない太陽は、落ちていく葉を残酷に見守っている。赤い死骸は人間に踏みつけられて可哀相。それらに個としての名前は無い。もしかしたら、あるのかもしれない。けれどあたしはそれを知らずに、毎日それを踏んでいる。
膝上まで捲った灰色のスカートを揺らし、紺色のハイソックスと黒のローファーで通学路を進んでいる。そんな女子は学校の生徒の数だけ存在するのであって、あたしでなくていいのだ。あたしが選ばれたのではなく、あたしが学校に選ばれた。高校なんてそんなもんでしょう。あたしは結局、大人数に埋もれるだけ。あたしは、赤い死骸。
死骸は生きている人たちにはなれないのです。死んでいるから。
でも死んでいるからと言って、可哀相と言われる筋合いは無い。あたしは自分を可哀相だなんて思わない。前方を歩いている、猫背の黒髪ちゃんのようになんかならない。猫背は、あたしにしてみれば自信のなさの証明だ。猫背だから自信が無いように見える。だのに猫背を直そうとしない。きっと、「そう見えるよ」だなんて言ってくれる友人が居ないのだ。あたしにも居ない。けれどあたしは自分できちんとわかっている。猫背になっては駄目。
あたしだけがしっかりと前を見ている。
あたしはきちんと、前を見れている。
「おはよ」
ちょっとした決心のようなものをしていると、背後から声を掛けられた。夏休みが終わる前に急いで染色したらしい茶髪の名残が見える黒髪が、無慈悲な太陽の攻撃を受けていてあたしは少しだけ勝ち誇ったような気分になる。あたしの髪は黒い。染めたことなんてない。あたしの方がいい子ちゃん。
彼女はクラスメイトの一人だ。クラスメイトって便利な言葉だ。そう言っておけば適度な距離を保って人と接することが出来る。等間隔のようで、たまに接近したりもするけれどそれ以上の深追いをされずに済むのだから、とても便利だ。
「おはよう」
「なんかテンション低くない？」
「朝は低いの！　ほっといてよう」
「えー、今日あれだよ。ほら、球技大会」
「あたしサボる気満々だもん」
「どこに？」
「適当に動いてれば上手い子がどうにかしてくれるし」
全力を出すのは恥ずかしいこととは思わないけれど面倒なことは面倒でしかない。球技大会で扱われる種目はドッジボールやサッカーにバスケットボールと、下手をすれば怪我をするものばかりだった。するのはいいけれど怪我なんてしたくないし、痛いのは嫌い。
サボる、とあたしが言うと彼女は否定の表情を見せずに、なるほど、と頷いたのでいい気分になった。どうやら彼女も同じ考えに辿りついたようだけれど、生憎あたしは言ったようにするつもりはさらさらない。
本当にサボるつもりだ。学校を抜け出して。
あたしが居なくてもいいのに上手くいくのだから集団が嫌いだ。あたしが居なくても回るのが嫌だ。あたしが死骸のように扱われる集団が、嫌いだ。
見劣りする人たちがいくら羨望のまなざしであたしを見ようと、余程の美人が僻もうとあたしにはなんの影響も与えられやしない。あたしはもっともっと、個として必要だとされたい。落ち葉の中だとしても、死骸だとしても、その中から拾われ大切にされる一品でありたい。
そう思っている全員が、そうやって口にしない。だからあたしも閉口している。言いたいのを我慢して我慢して、そうやって過ごしている。もっと注目を浴びたいだけの目立ちたがり屋とも言うのだろう。でもあたしは目立つだけでは足りないって、そう考えているから、アクションを起こす。
だってサボれば怒ってくれるでしょう？　そういう安直な考えなのだ。
「そっかコート内かあ。ナイス」
「でも先生に言われても知らないよー」
「それはそっちもでしょ！　乗っかるから上手くやってよ、お手本に」
「出来たらねー」
笑え。スマイル。
決め手の一発。相手はこれで大体満足する。嘘は吐いていないだろうな、と思ってくれる。人って簡単だ。複雑なのは内面だけで、そう思っている自分が適当なだけで、結局はどうにかこうにか動かせてしまうから簡単だ。
太陽で見える茶髪の名残を見て、あたしはまたほくそ笑む。
ああ、勝負にすらならないなあ。

＊

開始のホイッスルと同時にあたしは見事に校門をくぐっていた。太陽は先程よりも高い位置にあり、明らかに帰宅するような時間ではないことを告げている。校庭方面からは応援の声がしている。女子の声しか聞こえないせいで、うるさくて仕方がない。

対して校門を出て数分の住宅街は閑散としていた。主婦の皆々様が家事をこなしていることだろう。精一杯働いている掃除機や洗濯機の稼働具合こと、その悲鳴には耳を塞がないでいた。生活の音はきれいだと思う。

さて、どこに行きましょう。

学校を出る言い訳には仮病を駆使した。ただ、出たとしても行く宛がないのはどうしよう。親には球技大会だということも伝えてある。家には居ないだろうけれど、早く帰って来ると言っていたから鉢合わせる可能性もあるかもしれない。この辺りでは出会わないだろうけれど、もしものことがあったらどうしよう。ノープランで動き回っていたことを後悔した。

けれど最初からそうしなければ良かったなあ、なんて思っていないのが自分の一番恐ろしいところだ。

自分でも何だか欲深いとは思う。けれどそうされたくて仕方がないのだから、どうしようもない。一回だけ——そう、一回だけ他人に相談をしたことがあるけれども、その答えを実行することすら面倒であたしは却下したのだった。

何が彼氏だ。どうせ裏切るんでしょ。

心の内で吐き捨てたことを思い出す。相談しなければ良かった、だなんて思ったことも思い出す。その日から相談相手の株が急落して地に落ちたことも。あたしにとっては重大事項だったから、それを軽く見られていたような気がしてならなかった。この子は新羅してはいけない子なのだと、あたしはもう期待することをやめた。

あたしはあたしを大切にしてくれる人が欲しい。彼氏だとかどうでもいい。そういう人がいい。そういう人が好き。

かつん、かつんと自分を知らしめるかのように足音を鳴らす。新品ではないローファーは踵がすり減っている。まっすぐ歩いているあたしは、すり減り方が偏りなどしない。偏屈な音を立てているのは、いつも猫背なあの子たちだ。

かつん、かつん。

足音が一つしっかりと響いていることを確認しながら歩いていると、学校近くにある公園に辿り着いた。公園には大人が一人居るだけだった。あるはずの遊具がどうやら使えないらしく、危険だからと入れないように黄色と黒のテープで辺りをきちんと保護している。包囲かもしれない。子供が入って来られないようにしている。

あたしは堂々とテープをくぐる。

「おい」

設置してあるベンチに腰かけていた大人があたしのことを引き留めようとした。あたしはそれでも止まらずにテープの内側へと入り、そうしてから大人の方を見た。

大人——その男性は灰色のつなぎを着ていた。ぼさぼさの髪は男性にしては長い。多分、切り忘れ続けているんだと思う。髭だけはぱっと見たところ見えなかったから。ついでに彼は黒曜のような瞳であたしを睨みつけている。イラついているような感覚はしなかった。

あたしはゆっくりと首を傾げる。右に。彼はそんなあたしのことを見つめていた。身長の高い男性を見つめ続けるのは首がちょっとだけ痛い。

「どうしたの、お兄さん」

公園にはあたしとお兄さんの二人しか居ないのだ。

あたしは勿論、この場から動く気なんてさらさらない。広いとはお世辞にも言えないこの公園には赤いブランコと彼が座っていたベンチに、砂場程度しかものが無い。ブランコはテープによって囲まれてしまっているから、誰も遊べない。でもあたしはブランコで遊びたい。だから退かない。

そういえば、彼はどうしてあたしのことを呼びとめたのだろう。やっぱり、あたしが危険なことをしていると思っているのだろうか。それならお兄さんはとても馬鹿だ。あたしは自分が死ぬと思うような場所には絶対に行かないのだ。

死んだら終わり。おんおん死んでから泣かれたって、あたしはちっとも嬉しくなんかない。見られて本望？　いいや、そんなことはない。あたしは生きている間に見つめられたい。

今、このときのように。

「ねえお兄さん」

彼は何も言わない。

言えないように見えた。言葉がどこかに行ってしまったのだろう。言いたいことも言えない人だなんて、なんて可哀相なのだろう。ああ、可哀相。

「あんた」

彼の声は震えていた。

何が怖いのか、あたしには全くわからない。彼の目の前にはあたししか居ないはずだ。背後に何も感じないし、彼の気のせいだろう。というか、彼が勝手にあれこれと考えているのなら、あたしはブランコで遊びたいわけで。

「なあに」

けれどここで素知らぬ顔をしてブランコで遊び始めたらさらにお兄さんの悲壮感が増すと思った。慈悲のような心。もっとあたしの優しさに気づいて。そう、あたしは優しいの。

「学校は」

「サボっちゃった」
お兄さんがしてきたのは警官がしそうな質問だった。確かに、この時間に街を歩く女子高校生もなかなか多いものではないだろうし、加えて制服なのがさらにわかりやすい。狙っているわけでもないのだから許してほしい。今日がたまたま登校日だっただけで、たまたまあたしが学校をサボりたくなっただけなんだ。ごめんねお兄さん。
サボっちゃった、と事実をそのまま言ったあたしに対するお兄さんの態度と言えば、固くもならず、怒っているようでも無かった。寧ろほっとしているようだった。肩を撫でおろし、その長い黒髪を掻きあげる。額にはニキビも何も無かった。よく見てみればお兄さんの肌が綺麗だった。
「美丈夫」
思わず声に出してしまったのはあたしが最近覚えた言葉だ。美丈夫。美しくりっぱな男子。お兄さんは男子なのかな、と考えてみる。灰色のつなぎが似合っているから、きっと体格はいいほうなんだろうな。ピアスが開いてる。両耳に一つずつ、シンプルなリングピアス。校則が無かったらあたしもピアスを開けるのに。そしてお兄さんの手が無骨で、指輪があることにも気づく。右手薬指だ。
「び、びじょう……なんだそりゃ」
「美丈夫だよ、お兄さん」
頭を掻く右手のうちの指が一本、光っている。
ああ、この人にもちゃんと自分を見てくれる人が居るんだなあ。羨ましくて仕方がない。それはどうせ、彼女と交わしたものなんだから、あんたが否定した彼氏でも作れば同じよ、とあたしの中で友人だったものが囁く。でもね、それは違うんだ。あたしが欲しいのは、お兄さんと同じものじゃない。同じじゃないからきっと羨ましい。他人のものは、すぐに欲しくなる。ただそれだけだから、言わせてほしい。
羨ましいなあ。
その羨望の対象であるお兄さんは、やけに「美丈夫」という言葉に反応していた。照れているわけではなかった。ひどく慌てて、何度も何度も頭を掻いている。
「禿ちゃうよ」
「あ、いや。違う。久しぶりに言われたもんだから」
「……お兄さん、意味わかって言ってる？」
もしそうならとんだナルシストだ。あたしよりも性質が悪い。しかしお兄さんは首を横に振る。
「わからねえけど、まあ褒めてるんなら悪い気はしねえ」
「褒められてるってわかってるんだ」
「ニュアンスでわかるもんだろ、普通に」
「わかるわけないよ。わかったら苦労しないよ」
あたしは咄嗟に毒を吐いた。遠回りな毒を吐く。初対面の他人に直接攻撃的な言葉を吐けるほどあたしは悪い人間じゃないのだ。
ほんのりとしたニュアンスで繋がる他人ならば、それはとっても楽だろう。あたしのような人間も、理解されやすいかもしれない。けれどわからないからいざこざや勘違いなんてものが発生することをお兄さんはわかっていないのだろうとあたしは思った。
もっと見て。もっとあたしにかまって。あたしは寂しいと死ぬ。誰が見なくても死ぬ。もっとあたしという存在を見て欲しい。
たったそれだけの願いを、人が我儘だなんて言うから言わないようにしている。一生懸命に行動にしているのだから、それこそニュアンスと同じようなものだけれど、もっとあたしが理解されてもおかしくないのに。
毒を吐いたあたしに対してお兄さんは、何食わぬ顔で答える。
「でもわかっただろ」
はいはい。そうですね。その通りでございます。お兄さんはわかりましたね。でもそれって一回聞いたことあるからですよね。知らなかったらどうなっていたんでしょうね。はいはい。
吐けるだけの毒を吐き散らす。そうしていないとお兄さんに対して今度こそ嫌味を吐くことになってしまいそうになっていた。
否定されたような気分だ。あたしの全部というものを。
一つが否定されると全部が否定されたような気分になる。どこでもいいそれに触れられるだけで嫌な気分になる。この人はずかずかとあたしのパーソナルスペースを踏み荒らしていた。
「……変な人」
あたしはまた遠回しに毒を吐く。
「それならあんたもだろう。ほら、学校サボったんなら早く帰れ」
「なんで」
「もうそろそろ取り壊しの業者が来るんだよ」
そのときあたしの脳裏には、大きなショベルカーが地面ごとブランコを抉っている画面があった。スクリーンに映っているそれを、あたしが眺めている。爽快だった。抉られた地面は乾いていて、抉った部分から亀裂が生じている。そのまま亀裂はどんどん広がっていき、最終的には公園ごと崩れてしまう。
うん。なかなかのイメージ。言うまでもなく最悪。あたしは好きだけど。そう言うと。厭世的、とか言われるけれどあたしは別に自分以外のことなんてどうでもいいので、今のイメージだってどこかの映画のワンシーン程度にしか思ってない。
やっぱり人間、自分が一番可愛いもんでしょ。

「どうしてお兄さんはそれを知ってるの？」
「俺が取り壊すから」
「業者さんなんだ。仕事熱心だね」
「いいや。ただの待ちぼうけだ。ほら、さっさと帰れよ」
しっし、とお兄さんはあたしを払った。
そのわりには彼の表情はやけに悪戯っぽかった気がする。そういえばお兄さんはおじさんではなかった。二十歳前後のお兄さんだった。
――二十歳前後でも、結婚するのかな。
何故かそんなことを思った。あたしはお兄さんの忠告通りにテープの外に出る。左手にしないのは、あれ。
「お兄さん」
「なんだ？」
「嘘吐き」
今度こそはっきりと言ってやった。
取り壊しだとか、そういうものに関係している人ってアクセサリーとかしてないものなんじゃないかな。ていうか、してる人見たことない。邪魔になるし自分が怪我するかもしれないもん。うん。きっとそう。
嘘吐きは前を向けないもの。
あたしは悠々とテープを越える。呼び止めようとする嘘吐きの手をすり抜ける。
自由に枯れ葉は落ちていって。どうしようもなく、どうしようもなく名前もつけられないほど些細な存在で。
「でもお兄さんより、もっと自由よ」
負けず嫌いの赤い死骸。
どうしようもなく無慈悲に踏みつけられる赤い死骸。
死骸は死骸らしく、伸ばされた手にも縋らない。
「おい」
「待たないよー」
お兄さんは未練がましくあたしの二の腕を掴んでくる。何がしたいのか全くわからない。
「ねえ、お兄さん。今のご時世、子供に話しかけるだけで捕まっちゃうんだよ？　いいの？」
「別にいい」
「いいんだ」
犯罪歴を自分から塗り固めていこうだなんてマゾな人も居るものだと感動する。いいや、マゾどころかドマゾかもしれない。

「何。気持ち悪い」
「そうかい。なあ一つだけ聞いてくれ」
「聞かない」
「一つだけだから」
「そうやって、大人は子供を攫うし悪いことに使うんだよ。知ってた？」
世間のニュースじゃ子供が被害面して出回っている。子供は愛されるもの、守らなくてはいけないもの。だとすれば、大人とは守り愛さなくてはいけない存在のはずなのに、たびたび悪いことをする人が出現する。そういう人たちが、悪い人として報道されているのだろう。
でもあたしは知っている。その中には悪い子供も居たもんで、そういう子が増えないように制限して話しているだけの大人たちが居ることも。
お兄さんの言いたいことはきっと悪いことではないんだろうなあ、と思いながら私は断る。
変なことに関わってはあたしを見る人が居なくなってしまう。
いっそ報道されて、悪い子供だったり被害者面して泣くのもいいかもなあと思ったけれど、結局あたしはちやほやされたいからそれも違う。
「しつこすぎだよお兄さん」
「あ、いや……」
「ヘタレ。あたしそういうの大っ嫌い」
女子高校生の口を舐めてはいけない。寧ろ女の人を舐めてはいけないのだ。「勘違いさせちゃったかも！」だなんて笑顔で言うような人種が多数を占める性悪が居るっていうのに。でもあたしは大丈夫。悪態はつくけどそんなことしないしそういうことに興味ないし。
一瞬だけ緩んだ彼の力に抗ってみせると、あっという間にひゅるりと抜け出すことが出来る。そのまま何歩か進んで距離を確保すると、あたしは振り向いた。
あのお兄さんは泣きそうな顔にこそなっていないけれど、見るに耐えない顔をしていた。情けないったらありゃしない。綺麗なのに、勿体無い。
あたしは考える。あの人は悪い人だと。
あたしは感じる。あの人は可哀相だって。
あたしはとても優しい人なので、ちょっとのお情けと助けをあげる慈悲を持っている。
「明日なら話聞いてあげてもいいよ、お兄さん」
ちゃんと学校終ってからね、と付け足して足早に公園を去る。その後お兄さんがどうなっているかだなんて、あたしには全く関係が無い。
あたしはあたしが大好き。

あたしは可哀相な人が好き。優しくしてあげればころっと手のひらを返すから。それでいて、あたしのことを見てくれるから。
もっともっとあたしより可哀相な人が溢れていけばいいのになあと、物騒なことを考えながら突き進んでいく。目指すは家。言い訳はとりあえず帰ってから。
赤い死骸を踏み抜いて、あたしは今日も生きている。

私の美、彼らの美

はるゆかり

長期休暇中に都心の美術館巡りをした。ビジネス街のビルの中にある美術館はこぢんまりしている。だが小さいながらも洗練されており、趣向を凝らした空間となっている。展示品のクオリティーさえ高ければいいというものではない。足を運ぶ人はそこにアミューズメント性も求める。だから隅々まで気を配ってこその美術館、すなわち館内の造りも展示品と同じ芸術作品とみなされることを意識しなければならない。

白銀台にある東京都庭園美術館は建物そのものを展示対象としている。その格調の高さ、スケールの大きさには唖然とするばかりだ。旧浅香宮邸を美術館として一般公開しているのだが、迎賓館だったこともあり調度品で飾られた室内の高貴な佇まいは二次元の世界では味わえない。日本に現存する代表的なアールデコ建築である。主な内装設計はフランス人デザイナーが担当し、ガラスレリーフやシャンデリアは有名なガラス工芸家ルネ・ラリックが手掛けた。壁に掛けられたデュフィらフランス近代画家たちの絵画が、ラリックのガラス作品と共に１９００年代前半のフランスに生きた芸術家たちの静かな情熱を語っている。めざましく変わる芸術の価値を先導していく彼らが、仲間と影響を与え合うことで昇華していく。ここにいると、生みの苦しみと喜びの渦中にいる彼らのドラマをじかに見ているようで胸が熱くなる。ぜひ一度訪れて芸術家たちが重ねた時間の重みを感じ取ってほしい。

私が最も好きなのは根津美術館だ。名前からてっきり根津にあるものだと思い込んでいたが、実は青山にある。実業家、根津嘉一郎のコレクションを展示するために建てられたものだ。戦災後に再建、増改築を大規模に行ったこの美術館はコレクションの豪快さに相応しい大きさがあり、それでいて瀟洒だ。私設美術館ならではの自由さがあり、個性に満ち溢れている。

今日は根津美術館をメインとした青山散歩に出かけよう。

半蔵門線、表参道駅から御幸通りを歩く。この通りは車道がやや狭く比較的静かで、青山の中でも特に好きなところだ。立ち並ぶ店のほとんどが全面ガラス張りで、ショーウインドーのみならず、中の商品も店員も客さえも見せるために在る。その万華鏡のような景色をゆっくり眺めながらちょっとミラネーゼ気分で歩いていると、しゃれたコンクリート造りの銕仙会能楽研究所がある。ここには能の舞台があり、毎月能楽が鑑賞できる。ＶＩＰ席以外は全て自由席なので並ばないと良い席が確保できないのと、椅子が硬くてお尻が痛くなるのが玉にきずだが、舞台と観客席が近いのでシテの足拍子の迫力が直に伝わってきてとても臨場感のある舞台を味わうことができる。

さらに美術館通りに向かって歩くと、目の前に竹林を構えた根津美術館が現れる。ここは洋式建築なのに和の風情がたっぷりで、東山魁夷の日本画を観るようだ。エントランスホールまでの細い通路の左壁面には黄白色の竹が整然と並び、右は緑の竹垣になっている。ここが美の世界への入り口なのだ。こんな素敵な演出に、根津美術館の心意気が伺える。吹き抜けになった広いホワイエは壁が全面ガラス張りで、庭園が一望できる。そこにいるさまざまな彫刻たちが思い思いに語り掛けてくるように感じるのは、根津嘉一郎と、彼が愛した作品たちを守り続けている人々の愛情の証しなのかもしれない。

根津のコレクションは絵画、彫刻のみならず、茶に造詣が深い彼らしく陶磁・漆工にも卓越した収集力を見せている。考古美術や金工・武具はその荘厳さをよく伝える展示の気配りに功を奏し見応えがある。その中で特に目を引いたのが白大理石でできた如来立像だ。高さ約３ｍ。その迫力はどんなに言葉を尽くしても伝えることはできないだろう。シンプルなフォルムがもたらす慈愛と威厳は、腕が欠けていても何ら弱まることはない。根津美術館を象徴するようなこの仏像はここにあるすべてのものを見守っているかのようだ。

せっかくなので庭園も散策した。この庭園は高低差がかなりあるため、下へ下へと降りていくと青山の一等地にありながら田舎の名所にでもいるような錯覚を覚える。日頃スモールサイズの景色に慣れてしまっているせいかもしれない。幽玄なこの庭の底で、私は美の迷路に迷い込んだ。それにしても何と厳かで美しい庭なのだろう。

鉄道王と呼ばれた根津には十分すぎる財力があった。戦後、青山は住宅地として街並みが作られていったが、根津美術館のあるこの場所はかつて根津の邸宅があったところで、庭の部分は元々傾斜地だった。その傾きからするとほとんど崖だったと思える。当時、中流の住宅街だった青山でなくてもステータスになる土地がいくらでもあったのではないだろうか。だが今の青山の姿を見れば、根津は自分の選択に満足するだろう。彼は美術品でも土地でも、また事業をする際も一般的に良しとするものは選ばなかった。しかし彼の手でそれらは全て大いなる財となった。他人の価値観に左右されず、ただの石ころさえ宝石にかえてしまう根津嘉一郎。生まれながらの大富豪は本当の価値がわかるのか。それとも頭脳が明晰だったのだろうか。どちらにしても私は彼の人生哲学がとても好きだ。真の豊かさとは何かと考えながら、この時間を与えてくれた根津氏にただただ感謝した。

美術館通りから骨董通りに出るとチョコレートの店、モンロワールに向かう。私は青山に来ると必ずここでチョコを買う。このお店は神戸の阪急岡本に本店がある日本のチョコレート屋さんだ。神戸元町にもあるのでよく買いに行っていた。

そう言えば神戸の友人ユリのママ、マダムカヲリもここのチョコがお気に入りだ。彼女はほっそりとしていて、陶器のような白い肌、きれいなアーモンドの形をした薄茶色の目、桜の花のようなふんわりとした唇を持つフランス人形のような人だ。

マダムのお家は阪急甲陽園駅から車で5分ほどのところにあった。大きな庭のある一軒家だが、この辺りは関西の大御所芸人、俳優、プロ野球選手などが住む超高級住宅地だ。その雄大な景観は日本のビバリーヒルズと言える。芦屋駅にも近いので、ＪＲを利用する私のためにいつもマイカーで迎えに来てくれた。笑顔で歌うように私の名を呼び、手を振ってくれるマダム。いつもながらあでやかだ。「私は地味なのよね」が口癖なのに前世はマリー・アントワネットだと信じて疑わない、おとぼけキャラのかわいい人なのだ。

マダムの家にはボーダーコリーがいる。貴族並みの血統書が付いた高貴な犬なのだが、どうも自分のことを人間だと思っているようだ。この犬が一時ストレスで頻尿になり、夜中に頻繁に起こされたマダムが「寝不足なのよ」と困り顔で言っていた。犬は黙って自分で用を足すものだと思っていたので不思議な気はしたが、とにかく人を起こす時には吠えるものだ。それなのに、彼は黙って前足でトントンとマダムの背中をノックする

のだ。マダムのことを恋人、いや妻だと思っている。散歩中に突然走り出すのでマダムはいつも足をやられている。「駄犬なの」と優しく微笑んでいるが、躾の問題なのではないだろうか。

マダムは決して大声で笑ったり怒ったりしない。マダムの人生論は芦屋駅から豪邸までの車中でたっぷり聞くことができる。独特の美学を持っており、安易にブランド品に手を出したりせず自分の価値観と審美眼で物を選んでいると言う。関西に長く住んでいるのに決して関西弁は使わない。福岡出身なのに完璧な標準語を話す。

犬による捻挫で包帯を巻かれた足を少し引きずりながら、きちんと髪を夜会巻きにセットアップして、濃紺のワンピースに身を包んでしずしずと保護者会にやって来るマダムの人生哲学には神々しいものがある。名もなき小さな花を愛する、大輪の薔薇のような人なのである。

そのマダムが小さな夜のティータイムにお勧めしていたのが、ここモンロワールのトリュフチョコ。季節限定品が楽しく、マダムのおススメはハロウィンのかぼちゃトリュフとおばけのイラストがユーモラスなトリュフだ。モンロワールは製菓会社が元祖であり、外国製のチョコほどカカオやミルクのこくはないが、他の素材と合わさることで生まれる美味しさを作り出すのがうまい。私のお気に入りは抹茶トリュフ。チョコ＋抹茶＝抹茶チョコ　正しい味だ。

骨董通りを表参道駅に向かっていくと、お気に入りの小さな洋服屋さんがある。ヴゼットというお店だ。系統としてはモード系なのだろうが、フェミニンなものが多い。テキスタイルデザインが北欧っぽいので、色彩があざやかでありながら上品な感じがする。ヴゼットは日本人デザイナーが作った小さなブランドだ。店舗も2つだけ。ここだけ感は今の時代、とっても魅力的。それに製品が日本製なのがいい。日本製と外国製の品質の差は実はあまりわからないのだが、日本大好き人間としては日本製というだけでうれしくなる。日本人は細やかにもの作りをする。職人気質のこのブランドは、こだわりを持ちながら胸を張って服作りをしているのだろう。

私はファッションフォトグラファーのいとこが出した写真集を見ているうちに、モード系に魅力を感じるようになった。写真はストリートスナップだが、老若男女が冒険的な衣装に身を包んでカメラに収まる表情がナチュラルでとてもいい。「着たくて着ている」という満足感から湧き上がる自信が全身に溢れている。

本来、モードとは流行という意味で、モードファッションとは有名デザイナーブランドの最新コレクションのことだった。確かにプラダやエルメスの服は、流行の先導役を担うことができるくらいハイセンスだ。着る人を選ぶ服とも言える。斬新さを求められるため、モダンアート作品をファッションに取り込むこともあるが、アートとファッションはなかなか相性がいい。２０１２年に草間彌生とヴィトンが共同制作した商品を売り出し、銀座のヴィトンのショーウインドーが行く人の目をくぎ付けにしていた。その派手さ、斬新さと女の子らしさを見事に融合させたブランド企画は大成功した。草間彌生は芸術家である。私は彼女の作品を鑑賞するのが好きだ。でもヴィトンの水玉模様の靴も履きたい。

ニューヨークで活動する草間彌生の芸術が高く評価され、「前衛の女王」と呼ばれて５０年余り。彼女自身が芸術でありファッションであることを証明するかのように、自分のアートを衣服にして自身を芸術作品として扱った。そして美術界からもファッション界からも更に注目される先駆者となった。

毎日新聞の記事によると、今、カタカナが世界のファッション界で注目されているそうだ。

カタカナＴシャツが人気だという。発信元は「渋谷１０９」で、外国人観光客向けに企画販売されたものだが、カタカナを図形と認識する外国人のみならず日本の女子高生やファッション好きの若い女性の人気も集めているというから驚きだ。カタカナは「カワイイ」らしい。　絹谷幸二はフレスコ画に喃語を描き強烈な画面を作り上げていたが、母語の文字を、意味を持たないものとして脳に認識させるのは難しい。しかし日本の若い女性たちは、脳の習性を飛び越えてオシャレを追求する貪欲さと柔軟さを持ち始めた。

女性の順応性は子孫を生み育てるという生物学的役割に適した特性なのだろう。近頃は料理男子にイクメン、オトメンという言葉まで飛び出してきたが、真の意味で女性的というのとは違う気がする。他人の価値観を認められる人、先のことを考えてじっと我慢できる人、主張ばかりせず他人に譲ることができる人。このような人が本来の意味で女性的と言えるし、男女どちらであっても誰かを教え育てる時には大切な姿勢だ。しかし今の社会でこのようなスタンスでは能力が低いと見なされ、社会で生きにくくなってしまう。そのため子育ての上手な人間を育成するのが難しくなっている。そして集団教育に順応してきた若い母親たちは、子育てでその矛盾に行き詰っている。だが、街で見かけるお母さんたちは子供を大声で叱りつけたりせず、言い聞かせることでわからせようと努力している。かなり辛抱強く子育てしているように見える。

肝っ玉母さんという言葉があるように、女性はいつも大らかさと辛抱強さを求められる。それに応えられる時もあるが、そうでない時もある。男性と同等に社会で働き、家でも賢い振る舞いを望まれる。何という無理難題なのだろう。それでも、時に立ち止まりながらも前に進んでいく。強く、たおやかに。

青山は女性が生き生きとしている街だ。美しく凛とした女性がよく似合う。青山を歩くのはスケールの大きな現代美術館を歩くのと同じだ。絵画や彫刻だけが芸術ではない。建築物や街の構造、そしてその中にいる人々もまた芸術なのだ。この街の色彩は女性たちの頑張りの象徴だ。だから私もここで息抜きをしようとは思ってはいない。青山は刺激を受けて緊張を呼び戻すために訪れるところだ。

著者紹介

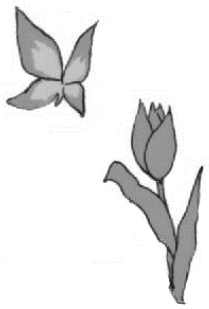
草津出（くさつ・いづる）学生。東洋大学文学部日本文学文化学科二年。次期会長。無類の温泉好きとして知られ温泉ソムリエを目指している。死ぬなら間欠泉と固く誓う。眼鏡。

八名井明（やない・あきら）学生。東洋大学社会学部社会心理学科二年。茶道部。無類の谷崎好きとして知られ谷崎マイスターを目指している。奇跡の裸眼。

林羽夢（はやし・はむ）学生。東洋大学文学部哲学科二年。夏の展示会でうっかり新入生に。無類のハム好きとして知られハムスターを目指している。眼鏡。

はるゆかり　学生。東洋大学日本文学文化学科二年。広報部長。もう三段落ちをやってしまって書くことがなくなってしまった。眼鏡。

rico　学生。東洋大学社会学部社会福祉学科二年。挿画提供。眼鏡。



沈黙は非常に意味深い雄弁な力です。
沈黙はひとつの告白です。
——ポール・ヴァレリー

新白山文学別冊第五号

編　集　渡邉和教
発　行　文藝サークル“綴”
印　刷　共信印刷
http://ttuduri.web.fc2.com/
http://ttuduri.blog.fc2.com/
https://twitter.com/toyo_tuduri
ハッシュタグ　#新白山文学　にて感想等お待ちしております。

2015 年 11 月 1 日初版第 1 刷発行

bungei_ajo@hotmail.co.jp
表紙　渡邉和教
挿画　rico

不許無断転載